

European Economic Development p. 66—67)

かくて、「外部からの統制からの自由」獲得のための都市の第一革命以後、都市貴族にたいする第二の革命、さらにギルド内部の闘争である第三革命へと、都市内の階級的対立は發展して行つた。組合内部の闘争は、職人徒弟の地位の固定化、商品經濟の發展による家族的温情主義の消滅、親方の職人徒弟にたいする搾取の強化などを原因として起つたものであるから、かゝる内部対立の爆發は、ギルドそのものの矛盾を意味したのである。もともとギルド組織は手工業發達のある段階に發生し、その當時においては手工業生産力や商業の發展を目的とし、事實また商工業の發達に大に寄與したのであるが、それらは本質的には獨占的、制限的、拘束的性質を持つものであつた。したがつて手工業生産力や商業がより高度に發達するにもなつて、これら制限的なギルドやツンフトは、却つて邪魔物となり、將來の一層の發展のためには束縛、桎梏にまで轉化したのである。

かゝる經濟的原因に、ギルド内部の對立・抗争が加わつて、ギルドシステムは遂に崩壊しなければならぬ運命となつた。それによつて、手工業、商業にとつては廣大な自由の天地が開かれたのである。中世における商業の發展は、手工業生産力の増加による餘剰商品交換の結果を基本的原因とするのであるが、西ヨーロッパの商業は、かゝるヨーロッパ内部の原因のほかに、外國貿易によつて刺戟され、それは新大陸、新航路の發見によつて更に顯著な進展を見せたのである。ヨーロッパの中世都市は商工業の中心地として發達し、この都市において商工業に従事する近代ブルジョアジの先驅者としての商工業階級は、これら商品生産の普遍的擴大によつて巨大なる富を築き上げた。この巨大なる富は商工業に依る利潤のほかに暴力的掠奪たる海賊行爲、植民地の暴力的收奪による原始的蓄積によつてなされた。

かゝる蓄積された富は、二つの異つた資本形態、すなわち商業資本と高利貸資本として中世から受けつがれ、この二つの資本形態は同一資本の二つの機能としてあらわれたのである。商業資本は資本の歴史的にもつ、もつとも古い、しかも自由なる存在様式である。この商業資本は商品生産から出發し、一方では商品生産を更に促進し、他方では交換手段としての貨幣の生成發展を促進し、工業資本の前段階をなしたのであり、工業資本は商業資本によつて育成されたのである。

第二節 資本主義の前提条件としての商業資本

中世封建的生産關係の資本的生産關係への變革の歴史的前提をなすものは商業資本 (Handelskapital, commercial Capital) である。この商業資本は先ず、(一) に貨幣財産集積の豫備条件をなしたということにおいて、(二) に商業のための生産を小數の顧客ではなくして不定の多數の顧客を相手とする大規模の販賣と、自らの欲望充足のためではなく多くの購買行爲とを自らの購買行爲に集中する商人群をつくり出したということにおいて、(三) に生産に交換價值を目的とする性質を與え、諸生産物を商品に轉化するということにおいて、(四) に封鎖的または自足的な生産方法及び家内工業ギルドなどの小規模生産等の生産方法、それらの生産方法において結ばれる中世的生産關係、その生産關係の上に築きあげられた政治的、社會的、觀念的構造のなかに入り込んで、それらの崩壊を刺戟したという點において、それらの點において、次に現れた産業資本 (industrielles Kapital, industrial capital) の爲に道を拓き、資本主義の成立の爲に必要なる諸条件を作り出す歴史的使命をもつたのである。商業資本は産業資本の先驅である。

商業資本の循環は $G-W-G(G+g)$ なる過程をとる。Gは貨幣形態をとれる資本すなわち貨幣資本である。Wは商品形態をとれる資本すなわち商品資本である。故に商業資本は貨幣資本及び商品資本からなるのである。gは商業利潤である。此の商業利潤は流通過程に於て作られ、商品資本の賣却に於て實現されるものである。生産過程において新しい價值が作られるところの産業資本とはこの點において異なるのである。商業からの利潤は安く買って高く賣るといふ原則に依つて、兩價格の差額を搾取することから生ずるのである。すなわち商品の移轉または移讓そのものから生ずる處から商業利潤は移轉または移讓利潤とも言われている (Veräußerungsprofit)。従つて商業が利潤をあげるためには移轉行爲または移讓行爲すなわち交換が必要となり、商業資本の成立及び發展のためには交換するといふことが前提となる。交換の發展は必然的に貨幣を發せしめるものである。従つて商業資本の前提をなすものは交換と貨幣とである。交換が生れて貨幣が現われてこそ商業資本はその存在の可能性を與えられるのである。商業の役割は交換の媒介をなすと言ふことにある。商業の交換に對する關係は結果であつて原因ではないのである。しかしてこの媒介にあつての手段は一般等價物としての貨幣である。最初に資本となつたものは貨幣であり、商業資本は資本の第一形態である。商業資本は貨幣資本であり、商人の持つ貨幣は

資本として作用するのである。そして商業資本は商業利潤を獲得するところの原本である。かくして商業は交換の媒介という役割を演ずるとともに、貨幣の増殖を目的としているのである。

商業資本は交換と貨幣とを前提とする。然し商業資本の持った役割というものは、貨幣經濟の發展に伴つて、また反對に交換すなわち商品流通を促進し、その間に生産に刺戟を與えるということもまた事實である。商業資本は交換を通じて貨幣の増殖ということを目的とする限り貨幣經濟の一般化、高度化の動機を與えるという事もまた疑うべからざる事實である。商業資本は以上の様な性格を持つことから商業資本の下においては資本の形態は貨幣であり、生産は流通に支配され、資本の利潤は商品の賣買に依つて實現される。その際媒介者たる商人が貨幣價格を比較して、その差額である超過分を利潤として着服するのである。商業利潤の源泉は直接生産者（農民又は都市手工業者）の労働收入の一部または地主、領主の搾取的收入の一部である。

中世封建制度は大土地所有に基づいて農業を主たる生産とするところの生産關係の上に築かれているのである。ローマ帝國の滅亡後の混亂の間にヨーロッパの全體、殊に西部（ドイツ、フランス）及び北西部（オランダ、スエーデン、デンマーク）では經濟生活、社會生活は再びもとの原始的生活に歸つたのである。

古代社會（ギリシヤ、ローマ）の一定の程度に達した手工業生産、商業貿易なども減んでしまつて、ヨーロッパにはごく素朴なる農業が主たる生産となり、大土地所有の上には封鎖的な自足的經濟が行われたのである。Hammondの言う如く中世の人達は彼自身の食糧のみを耕作し、彼自身のみ糸を紡ぎ、彼自身のみ布を織る事をして來たにすぎなかつたのである。ギピンスはその著書に於て（Gibbins, The History of Commerce in Europe 第二篇、第一章）當時の生産を次の如く述べている。民族大移動の結果、農工業は徹底的に衰微し壊滅され、四、五世紀の間ヨーロッパの最も豊沃なる土地が荒廢した不耗の土地と化し、個々の村に個々の家庭で行われていた紡績の如き家庭的技術を除いては何等工業に見るべきものもなく、第九世紀に於ても、國王の衣服すらも農場において直屬農奴の手に依つて織られたものである。村落には鍛冶工、機織職人が居たがこれ等は極く小數の孤立したものであつて、いまだ工業又は手工業とは呼ばれ得ないものであつた。かゝる状態においては過剰生産物はなく、従つて交換もなく、商業もなかつたわけである。ただローマ大帝國の残りである東ローマ帝國がコンスタンチノープルに建設されて、其處に當代の文化が結合して所謂 Byzantine Empire の文化を形成していたのであるが、然しそれも永くはつつかかなかつた。だが大土地所有に基づく各封建領内においては領主直屬の手工業の仕事

場があり、農奴である農民も家庭に於て簡単な手工業を行つていたのである。これ等の手工業は自足的な生産であつたのであるが、農業の發達、戦争が技術の發達を促し、一方ではカール大帝 (Karl der Grosse) の生産奨励があり、此等によつて従來農業の補助的な補足的な生産であつた手工業を少数ではあるが村落の手工業者 (craftman) に獨立せしめたのである。他方では領主の欲望増加が手工業の發達を刺戟したのである。領主は手工業者を莊園以外に派遣して技術を體得せしめたのである。これ等の事情は封建領内の手工業を漸次發達させて、始めて剩餘生産を可能ならしめるに至つたのである。Sombart の記述によると、例えば或る領主は年々貢租として農奴から收奪するチーズは九千六百九十四個に達し、或る教會領は一萬四千個のチーズを生産したのである。これらは領主やその家來の内では全部消費し盡すことは出来なかつたので、これ等の剩餘生産物は最初は莊園の内部に於て交換され、續いて莊園と莊園、村落と村落とで物々交換されたのである。この時代の交換は所謂單純商品流通であつたが、やがて交換の媒介者たる商人が現われ、殊に十二世紀中途には貨幣經濟が行われて、貨幣も流通するに至つたのである。商人の最初は旅商人であつたのであるが、やがて地方的な小規模な市場が成立した。地方の小商品生産者に依つて作られた生産物が直接に消費者に、または地方諸市場を通して地方的に流通するに到つた

のは商品生産の低度の發達過程である。然し市場の擴大につれて、小商品生産の中には分散的な生産と、集中された販賣との間の矛盾がかくされている。販賣は常に集中されている。販賣は各種の商品が集中する市場に於て行われる。分散的な生産と集中的な販賣との矛盾がそこに發生せざるをえなくなつた。商品生産の發展が少い時代に於ては、小生産者はその生産品を地方的な小市場を通じて販賣するか、又は直接に消費者に向つて販賣する。然し市場が發展してゆくにつれて、か様な分散的な小規模な販賣と言うことは不可能となつてくる。大きな市場における販賣は大規模且つ大量的でなければならぬ。然るに生産の小規模的な性質、然も分散的な性質は大規模な卸賣りの必要と相容れない。小生産者達が孤立して生産しつつある状態の下に於ては、富裕な少數の代表者達が販賣を自己の一手に引きうけて商品を集申せしめる以外にはこの矛盾の解決する道はなかつた。かくして買占人達は生産物を大量的に買い集めることによつて販賣の費用を節約し、販賣を小規模な偶然的な不規則なものから、大規模な規則的なものへと轉化せしめた。そのため小生産者達は必然的に市場から隔離されて商業資本の前に屈服せざるを得なくなつた。分散的な生産と集中的な販賣との間に發生した矛盾はかくして商業資本によつて解決され、統一された。地方的小市場の中から大市場が現れて、この大市場を中心として中世の都市が建設され

た。そこには商人ギルド、手工業者ツンフトが成立した。かくして手工業は漸次發展して、それにつれて商業も自己の獨立的地位を確立するに至つたのである。

これら歐洲内部の商工業の發達を外部から促進したものに外國貿易があつた。既にカール大帝の時に使節をバグダットの Caliph of Haroun Al Rashid に送り、またイギリス古代の國王と商業取引の協約を結んだ記録が存しているが、これは例外的で継続的な取引ではなかつた。既に古代社會に於てギリシヤやローマは東洋諸國と貿易を開き、ギリシヤは印度と交易し、アレキサンダー大王は地中海から印度のインダス川やアフガニスタンに亘る廣大な土地に大強國を建設し、ローマの貿易業者は當時生絲の生産を獨占し、重いた中國に渡來したのであつた。ギリシヤ、ローマの没落によつて、ヨーロッパの對東洋交通は斷絶した。それが復活したのは中世の十一世紀頃からである。この對東洋貿易の中心となつたのはヴェニス、ジェノア等の都市であつた。ヨーロッパに於てこれらのイタリー都市が外國貿易の中心となつた理由は自然的、地理的な原因と、これらの都市に於る經濟上、社會上の發達とが原因となつてゐる。此等の諸都市はすでに封建的支配を脱して、地中海における海上貿易を獨占してゐたのである。東洋からの商品はエジプトのアレクサンドリヤまたはレバント(Levant)の諸港からベニス又はジェノアの樁舵(Galley)で北伊の諸

港に運ばれた。そこからアルプスを越えて、ラインの川を遡のぼり、北部ヨーロッパに搬入されたのである。従つてその道路に都市が發達したのである。Henri Seeがヴェニス、ジェノア、フロレンスを以て資本主義の最初の表現と記している程に發達したのである。これらの北伊都市は貿易を通じてフランダースの都市同盟であるロンバート同盟(Lombard League)と結んだ。同時にハンザ同盟はバルチック沿岸方面に發展したのである。この時代の海外貿易の性質についてマルクスは資本論第三卷に次の如く規定してゐる。ヴェニス人、ジェノア人等によつて行われた當時の貿易は仲介商業(Zwischenhandel)であり、この商業は自己の生産物を輸出することによつてではなくて、むしろ商業に於てもその他の經濟的方面に於ても發達の遅れてゐた諸國家間の生産物の交換を媒介し、双方から商業的利潤を搾取することによつて主たる利益を獲得した。又 Adam Smith もその國富論の第三部第三章で商業諸都市の住民は富有な國々から生産品と奢侈品とを輸入し、以てヨーロッパの大地主の虚榮心に刺戟を與たえと述べてゐる。此等の大地主たちはかゝる商品を渴望的に購買し、その代りに多量の自國産の原料を支拂つたのである。かくしてヨーロッパ商業なるものは一國の原料をもつて工業の發達した他國の生産品と交換することに存した。かゝる傾向が一般化して一つの明かな需要を生ぜしむるに至つた時に諸商人は運賃節儉

の目的をもつて、自國內にも同様に製造業を始める様になつた。だから當時商業一般は單にかゝる中間的な役割を演じたにすぎないけれども、そのためにヨーロッパの商品は多くなり、領主達の欲望も強まり、またかゝる生産品の輸入と共に生産の技術も輸入されて、ヨーロッパの工業を促進する刺戟となつたわけである。かくして都市は勿論のこと、各地方の生産も高度化して生産は増加し、餘剰生産物も多くなり、ヨーロッパ全體の商業の發達を助長し、商業資本の蓄積、集積を大ならしむるに至つた。封建的生産關係に於ては大土地が大きな富であつたにかゝらず、貨幣を追求する商業資本はかゝる商業の發達に伴つて各都市に多額の貨幣資本を有する巨富を生せしめ、その巨富を有した富豪は前述せる如く散在せる小商品生産者を集中的な販賣に統一するに至つて中世の生産のもつ矛盾を解消し、巨大なる商業資本蓄積への道を開拓したのである。

かゝる都市的及び地方的諸商品經濟の時代、すなわち中世都市の *city* 時代までが商業資本の第一期であり、この第一期にありては、商業資本は發生、生成の時代を経て漸次小商品生産者を隷屬せしめて行く過程であつたのである。商業資本が手工業を支配することを完成したのは發見時代を経て世界經濟が成立してからのことである。ここに商業資本は第二の段階に入るわけである。中世に於ては東洋はヨーロッパより高度の文化が發達していた。例えばアラビヤ人は地中海

の南部及び東部海岸に於て、更にペルシヤ灣にかけてヨーロッパよりはるかに優れた文化を建設していたのである。このアラビヤ人の發展の基礎をなしたものは、中部アジアからアフリカの東海岸に沿うてマダガスカルに至るまで手をひろげた交通及び貿易であつたのである。アラビヤ人の貿易家はまた印度洋を横斷してマレー半島及び中國の南方海島までその活動範圍を擴大したのである。また中國はその時代までに各種の技術が發展して、高度に組織され分化された社會をもつていたのである。十三世紀には蒙古人が中國を征服して更にヨーロッパに侵入したのである。一二五七年、ヴェニス商人マルコポーロが招かれたのは元の皇室であつた。元の皇室は十七年間彼を技術の顧問として各種の技術の改革を行つた。しかし彼の中國訪問後一世紀過ぎない中に、蒙古人は敗退してそれと共に中國に對する歐人の關心もうすくなつて來た。此等東洋諸國の文化は歐洲の未知の發明をすでに完成していたのである（火藥、磁針等）。これらはすでに中國に於て發明されたものであり、アラビヤ人の手を通じてヨーロッパに輸入され、火藥はヨーロッパで更に改良され、やがて後代において反對に鎖國の中國を打破して、資本主義化させる武器となつた。磁針は羅針盤となり航海の科學的發達を促がして後の發見時代のために重要な役割を演じたのである。更に東洋には陶器、絹、寶石、武器、毛皮等を産した。また胡椒、辛子等の香

料 (Spices) を多量に産した。かくしてこれら商品は冬季野菜がなくて鹽漬の肉類のみを食ふことを餘儀なくされているヨーロッパ人にとつて大きな魅力であつた。此等の商品は要するに奢侈品であり、ヨーロッパの富裕なもの、即ち封建領主、貴族、僧侶達の欲望をそつたわけである。此等の歐人にとつて貴重なもの、貴重ならざるものとの交易を媒介をしたのが商人であり、數世紀にわたつてこれらの業務に従事したのはアラビヤ商人であり、彼等は東洋の商品を地中海の沿岸から搬んで、そこからヴェニス、ジェノアの商人がこれをヨーロッパの諸國に輸入したのである。

トルコは一四五三年にコンスタンチノープルを占領し、一五一二年にはエジプトを征服したために、東西の交通はこれによつて全く遮断された。當時の東西交通路は四つあつて、その一つはインド、ベルシャ灣、バクダードをへてレバントの海岸に至るもの、其の二はバクダードから北進してアルメニヤ高地を越えて黒海沿岸のトレビソントに到るもの、その三はインド、アデンを經て紅海、カイロを經てアレクサンドリヤに至るもの、第四はシリヤ、アラビヤ、ベルシャを經てダマスカスに至るものであつた。トルコの侵入によつてこれらの東西の交通路はすべて遮断されて、その結果としてこの貿易によつて繁榮していたイタリー、ラティン河沿岸の各中世都市、

ハンザ同盟の自由都市は没落するに至つた。しかし一度開かれた東西貿易、しかもこの貿易によつて多大の商業利潤を獲得することを知つたヨーロッパの商人達は、何とかしてこの障害を打開しようとした。しかしこの冒険を敢行しうるのは既に衰えたイタリー都市の商人ではなくして、それまではリスボンを中心として地中海の貿易覇權を握つていた新興ポルトガル人がある。ヘンリー航海王 (Henry the Navigator) を中心にして、十五世紀の初期から先ずアフリカ南下政策を行ふ、一四八七年にはディアス (Bartholomew Diaz) はアメリカの南端、喜望峰に達して、一四九七年にはヴァスコ・ダ・ガマ (Vasco da Gama) はインドのセイロン、Calicut に到着し、始めてアフリカ回航によるインド新航路が発見された。それより五十年の間ポルトガルの商人及び官吏はインド洋のすべての港、アフリカの東海岸、マレー半島、廣東、臺灣、日本等の各地に達して、一五〇〇年以後にはブラジル、メキシコ、ペルー、チリー等の南米の各地に到つて、それらの土地に於て貪婪と壓迫をもつて土人を脅迫して生産物を掠奪し、これを本國リスボンに持ち歸るといふ貿易を獨占した。次にスペイン。コロンブスはスペイン宮廷の奨励と援助をうけて、一五八二年に西インド諸島を発見し、續いて北アメリカの大陸が発見され、更に中央アメリカ、南アメリカもスペイン人によつて征服された。かくしてポルトガルとスペインとはあらか

る暴逆をもつて新大陸を獨占し、搾取したのであるが、その支配も永くは続きえなかつた。地中海を中心とするヨーロッパ内部の經濟に於て、それまで僅かに第二流の地位を示めていたイギリス、フランス、オランダがここにスペイン、ポルトガル兩國の恐るべき競争者として現われた。このイギリス、フランス、オランダはアメリカ、太平洋更にアジヤへと勢力を伸張してポルトガルの覇權に對して挑戦した。オランダは東インド諸島をうばい、イギリス、フランスはインドからポルトガルの勢力を驅逐し、新に三新勢力の間に各地區鬭争が開始された。これら諸國は舊世界には貿易をもつて、新世界にはセトルメントを建設することによつて、原料、礦物、金銀の掠奪を行つた。新世界はかくして開幕された。一六〇〇年にはイギリスが東インド會社を、一六〇二年にはオランダが同じく東インド會社を、フランスも又これに倣つて東インド會社を設立した。これらの會社は國家の特許狀により設立されたもので、國家の權力による植民地收奪の機關となつた。その他にたとえばイギリスは世界の各地に特許會社を設け、その中 The ancient company of merchant adventurer, Baltic company, Mascovy Company, French company, Levant Co. 等の如き海外貿易機關を設け、それを通じて植民地や經濟未發達地域の收奪を行つた。

「アメリカに於ける金銀産地の發見、土着民の剝滅、奴隸化、東インドに於ける征服と掠奪の開始、アメリカの商業的黒人狩獵化、これらは資本主義時代の曙光を示すものである。これらの牧歌的過程は本源的（原始的）蓄積の主要なる諸契機である」（資本論）。これらの後に起つたのは地球を舞臺とするヨーロッパ諸國民間の商業戦争であつた。新に發見された諸國の金鑛や銀鑛の開發は商業資本の蓄積に大きな役割を演じた。一五四五年にはボリビヤ、一五四三年にはメキシコに始つた金、銀鑛の發掘はヨーロッパにおける金銀の蓄積を激増させた。例えば一五〇一年から一五四二年の間に銀は四億六千マルク、一五四六年から一六〇〇年のあいだに更に七十八億八千萬の銀が獲得され、その結果ヨーロッパに流通する銀貨の量が著しく増加した。かゝる多量の金銀のヨーロッパへの流入は、貨幣經濟をより一般化することによつて商業を盛ならしめ、商業資本の蓄積を促進するとともに金銀の價格を低下させ、従つて物價騰貴を誘發した。この物價騰貴は農民、手工業者、都市の住民を破産せしめ、小規模生産の崩壊と直接的生産者（農民、手工業者）等からの生産手段の分離を強行せしめるに至つた。新大陸發見當初に於て各國の植民人は土人を殺し、例えばスペイン人は西印度諸島及び中央アメリカの各地の土着人を殺しつくすという慘虐行爲をあえてした。そのために植民地開拓に當つて労働者が不足となり、それを補給するた

めにアフリカの土人が捕えられて奴隸として新大陸に送られた。中世を通じてムーア人(Moors)はサハラを横断する黒人の奴隸貿易を行っていた。一四四五年からポルトガル人がムーア人にかわつた。一五〇一年には最初の黒人がスペイン植民地に輸入された。一五一七年にはチャールス五世がスペインの植民地に黒人奴隸を大量的に輸入する最初の特権を與えた。また一六一九年には最初の黒人がオランダの船によつて北米のバージニアにつれて行かれた。一五〇八年と一八六〇年の間に千五百萬人のニグロが奴隸として新大陸に送られたのである。この奴隸貿易(Trade)にはポルトガル、スペイン、フランス人等が従事して、人間そのものを中心とする奴隸商業によつて巨大な富を得たのであるが、これらの奴隸貿易をリードしたのはイギリス人であり、リバプールは實にこの奴隸貿易によつて開發され發展した。土人の殺戮によつて貴金屬その他を掠奪して本國に送るとともに、奴隸交易によつて巨富を獲得し、更に奴隸による植民地開拓後の詐欺的貿易によつて巨大な富を築きあげた。ヨーロッパ以外に於て掠奪、奴隸化、殺人によつて掠取した實物は本國に流入してそこで資本に化したのである。新大陸の發見、世界市場の發生は既にヨーロッパ自らの體内に起りつつあつた封建諸關係の解體に伴う大市場の形成及び貨幣商品經濟の一般化を促進することによつて、商業の發展を急速に然も大規模にした。その結果として

エンゲルスの言うように、地理上の大發見、それに伴う植民事情は商品の販賣を數倍に擴張して手工業のマヌファクチュアへの轉化を促進した。かくして商業資本はますます蓄積された。

資本主義の胎生期に於てはこの商業資本と並んで高利貸資本(Wucherskapital)が貨幣形態における資本の形成及び蓄積に於て大きな役を演じた。高利貸資本は商業資本と同じく直接には新しい價值及び剩餘價值を創り出さない。高利貸資本は資本の生産様式なしに資本の搾取様式のみを有する資本である。高利貸資本はのりのなる循環過程を取りつつ自己を擴大する。高利貸資本の利潤は他人への高利なる貸付けによつて獲得されるのである。その貸附の對象は農民それから小商品生産者、貴族、領主たちであつた。その利潤の源泉は商業資本の場合と同じく生産者の労働收入の一部または領主、貴族達の搾取收入の一部である。しかしてこの場合高利貸資本の貸付けは資本としてではなく、購買手段又は支拂手段として貸附けるのである。これに對して商人への貸附は資本としての貸附けである。高利貸資本はその高利性に於てまた購買、支拂手段としての性質に於て領主、貴族、農民、諸小商品生産者を漸次没落せしめ、封建の諸關係を解消せしめ、資本主義への前提を條件づけるとともにまた資本として貸つけることによつて商業資本の活動を敏速且つ大規模ならしめ、商業資本の力をますます強化してゆく作用をなしたのである。か

くて商業資本家は高利貸資本家と合體することにより、或いはそれと結ぶことによつてますます肥つていつた。商業資本と高利貸資本とは前資本主義時代に於ける貨幣形態における富の二大蓄積形態であり、そのことによつてこの兩資本は土地の形態に於ける中世的資本を貨幣の形態に於ける資本に變化せしめてゆく。しかしてこの兩資本が同一人によつて統一せられたる時、その資本としての力は一層強化せられる。そこに商業貴族が発生する。

この商業貴族 (Marchant Princes) のもつとも初期の一人として、佛人ジャック・クール (Jaque Coeur) の例をあげる。彼は一四三七年に於て毛皮の商人であり、王への金融家であつた富豪の息子であり、近東との貿易に従事して巨大な富をためた。彼は全世界の各地にエージェントを持ち、多くの船舶を有し、工場を建て、鑛山業を營んだ。彼は王に金を貸してフランス金融政策の形成に大きな力を及ぼした。彼は又アレキサンドリヤに於けるヴェニス商人達に關する事件を仲裁したり、トルコのサルタンとフランス王との間の條約を交渉したりしながら、フランスと近東諸國の間の關係を親密ならしめることに一役を演じた。Cunningham の云う所によると、彼は當時の金融界にて最も優れた人物であり、彼の時代以來金融の政治への力が非常に増大するに至つた (Cunningham, Growth of English industry and Commerce, Middle Times, part I, p. 251)。

これらの金融巨額たち、例えば Hochsteters, Baumgartners, Peruzzis, Medicis などの諸家の人達は大部分イタリーや南ドイツから來た人達である。Welsers は一五〇五年のポルトガル人の東インド諸島への航海に投資して一五二七年には半ば商業的に、半ば軍事的にヴェネツェラ遠征隊に費用を出し、又香料貿易に従事し、ハンガリーやティロルの銀銅山を經營し、それからドイツ、イタデー、スイスの重要な都市に建物をもつた。これらの商業貴族の巨頭の中で最もよく知られているのはアウグスブルグの Fugger 家である。この Fugger 家をはじめ建設したのは一四〇九年に死んだアウグスブルクの織工の小供達であつた。彼等は絹、衣服類、香料などの貿易で大なる産をなした。Jacob Fugger は事業を土地や鑛山の賣買にまで延長して、大小の貸附けを行つた。彼等の複合的事業から上る利益は三割以上、時には五割にもなつた。これらの事業がどんなものであつたかは、次にあげる一五二七年の Fugger 家の財産の表から見られる。

この表によつて當時の商業資本のもつ力、商業資本と高利貸資本とが一體となつていふこと、それらの資本が一部分はすでに産業資本化しているという事實を知ることができる。

外國貿易が盛んとなつて金・銀その他の生産物がヨーロッパに流入し、それがヨーロッパ内部に發達しつつあつた商業に刺戟を與えて、その商品流通、商品化を促進したと同時にまた海外よ

1529年におけるツツガー家の活動状態

諸領山 (チロル, ハンガリー)	270,000 Foring
不動産	150,000
諸商品 (銅, 銀, 貴金属, 織物)	380,000
現金	50,000
貸付	1,650,000
私的勘定 (private accounts)	430,000
その他	70,000
合計	3,000,000

この合計額は當時の通貨で4,500,000 フロドにあたる。ツツガー一家から金を借りていたものうちには、世間があり、チャールズ五世が
あり、彼等はこれの借金をもって1519年に帝王権を買ったのである (R. H. Soltan, An Outline of European Economic Development,
p. 101)。

りの新生産方法の移入、技術の習得により、ヨーロッパの生産もだんだん高度に発達してきた。かくて生産のかゝる発展は更にまた商品生産を一般化し、外国からの金、銀流入による貨幣経済の普及とともに商業一般をますます発展せしめた。かくして商業資本はますます蓄積され、大きくなつてきたわけである。国内に於ける商品流通の一般化による大市場の形成と更に市場の世界

市場への拡大とは商業資本の独立的な発展をその當然の結果としてもたらした。商業資本は得意の絶頂に達した。商業資本は前資本主義的生産様式に解體的作用を及ぼし、一方では土地所有者による農奴的農民の搾取を高める作用をするのである。何故ならば農産物の商品への轉化により、農民の現物的貢租、および餘剰労働の大きさは、土地所有者たる封建領主の消費のみに制限されなくなつてくるからである。他方貿易は奢侈品を供給することによつて領主達の消費を質的に高めた。

商業資本は手工業者に対する支配を獲得しつつ、漸次都市の手工業を解體せしめている。中世的生産關係の解體と高利貸資本による搾取とは小生産者を漸次没落せしめつつあつた。小規模な資本の少い散在的な手工業的小商品生産者は擴大する市場の需要に應ずる事が出来なくなつて來た。その爲に商品生産の發展の必要から富裕にして大規模な商品生産者が發生し來つて、小商品生産者の生存を不可能ならしめて來た。かゝる没落に瀕しつつある中小生産者は巨大なる貨幣資本を有する商業資本に統率されるに至り、ここに商業資本の手工業に対する支配が確立した。

レーニンはその著「ロシアに於ける資本主義の發達」に於てロシアにおける工業の原始的形態を次の様に説明している(岩波文庫版、下巻)。最初にあらわれた工業形態は家内工業(Hauswerk)

である。この家内工業は原料を採取すると同じ経済、すなわち農民家族に於けるそれらの加工のことである。家内工業は自然経済の必然的附屬物をなすものであり、それ故にロシアの経済史にはこの形態の労働、例えば自家用のための大麻、亞麻、木材その他の生産物の家内工業等がしばしばあらわれてくる。職業としての工業はこの形態の内には存在していない。すなわちここでは経営は農業と不可分的になされている。この家内活動についてあらわれて来たのは家父長的農業から分離された手工業であり、すなわち消費者注文による生産者の生産である。この場合資材は消費者、すなわち注文者に属することもあり、手工業者に属することもあるが、手工業者の労働の報酬は貨幣または現物をもつてあらわれる。手工業は都市生活の必然的な構成部分であるが、農村にも著るしく普及して農民経済の補充物となつてゐる。農村人口のある割合は専門的な手工業者であつて、皮革、履物、衣服の製造、鍛冶、染色、農民用羅紗の製造、製粉業等に従事している。この工業形態に於て商品生産は未だ發達していない。ここでは手工業者が貨幣で支拂をうけ、また労働の報酬としてうけとつた生産物を賣つて自ら原料または生産材具を買う場合にのみ商品流通が行われる。手工業者の生産物はまだ市場にあらわれない。それは農民層の自然経済の領域から殆んど出ていない。従つて手工業は家内労働と同じ様な舊套を墨守して分散性を帯

び、従つて狹隘なる性質をもつて特徴づけられてゐる。この工業形態に内在的な發展の只一つの要素は手工業者が他の地方に手間稼ぎに出かけるといふことである。その結果として従來の場所に獨立の手工業経営が樹立されるに至つたのである。この手工業が一度市場と接觸するや否や漸次市場生産に移行すること、すなわち商品生産者になるのは自然である。手もとに残つてゐるもの、または暇な時に製造された生産物が販賣される。この移行が非常に徐々にあつたことは生産物の販賣市場が最初は極めて狹隘であつたといふことで強められた。従つて生産者と消費者との間に距りは全く目立たないやうに徐々に擴大されて生産物は相變らず直接に生産者の手から消費者の手に移り、そして生産物の販賣に先立つて農業生産物との交換が時々行われる。商品生産のそれ以上の發展は、商業の擴張によつて専門家である商業買占人の出現によつてはじめて可能となる。生産物の販賣市場は農村市場または都市の市、定期市 *Messe, Foire* だけではなくて、全地方ついで全國的更に他國との交換にさえも發展してきた。商品としての工業生産物の生産は工業の農業からの分離、及びそれらの間における相互的交換に最初の基礎を與えるのである。

かういふ過程を経てあらわれた商人たる買占業者は生産物の販賣と原料の買入とに關する商業取引に専門に従事して、そして色々の形態をもつて小生産者を自己に隸屬せしめる。商人の小生

産者支配は四つの形態をとる。

- (一) 商人が小生産者の商品を買占めるに當つて、その獨占的地位を利用して生産者への支拂を出來るだけ少額にすること、すなわち生産物の價格を下げることである。
- (二) 貨幣をもたない、または僅かしかもつていない農村に金を貸して、すなわち債務者である農民を債務奴隸 (Kafara) としてその返済を生産物でもつてせしめる。
- (三) 買占めた生産物に對する支拂を貨幣ではなく、商品でもつてさせる。
- (四) 生産のために必要な商品例えば原料または生産材具の形で生産者に支拂うことであり、これはやがて豫め加工の材料等を提供することに變つてゆく。かくて市場から商業資本によつて切りはなされた小生産者は今また原料からも切りはなされて、かくて商業資本に全く隷屬せざるをえなかつた。そうなれば事實上は小生産者は商業資本家のために働く賃労働者となつたのであり、商業資本はここに於て産業資本に移行し、資本家的家内労働が発生したのである。

次にドイツの例を P. Kampffmeyer の著書 "Zur Entwicklungsgeschichte des Kapitalismus in Deutschland. (S. 26ff.)" 及び Die Hausindustrie in Deutschland (S. 5ff.) に引

て述べることにする。ドイツでは第十七世紀に家内工業制度 (Hausindustrie) が一般に行われたのである。この制度の特質は隷屬的な家内労働者によつて行われ、外觀的には獨立的な小商品生産者が商人によつて支配され、指導される點にある。當時ドイツの農民は封建的搾取に悩み、この苦境から脱する爲に副業として手工業を行つた。紡織業、刺繡、亞麻布製造、絹及びビロード生産が主要なものであつた。これらの手工業において各農家は女、子供、僕婢達までも動員して深夜に及ぶまで労働した。この小生産者と市場または消費者とを結ぶものは商人であつた。商人は單に媒介者たるにとどまらず、原料、道具、資本を無償または廉價に自分の手で集めて、これに大きな利潤を附して小生産者に貸與した。即ちこれら商人達は高利貸と商業とに於て二重に利潤を獲得していたのである。商人の小生産者に對する支配が強化して、小生産者と商業資本家との収益が對立するに至るや、ここに兩者の間に鬭争が生じた。一七九三年シレジャに起つた Weberrevolution (織工一揆) はハウプトマン (G. Hauptmann) の創作たる "Weber," として一般に知られている。なおドイツに於ては小生産者と商人との間に介在する Faktorensystem があり、商人の依頼をうけて、商人と生産者との間を媒介することによつて小生産者を搾取した制度である。イギリスの middleman system と大體同じ制度である。

イギリスでは、家内工業 (Domestic Industry) が十六世紀から、十七世紀に一般に行われた。Hobson の The Evolution of Modern capitalism によると、この家内工業制度の最も簡単な構造は農民が自分自身の原料を買つてそれをもつて家族と共に生産し、その生産物を彼自身、地方の市場や問屋にもつて行つてそれを賣るといふ形態である。職場は農村の彼の小屋であり、労働に疲れば農園にとび出して鋤や鋏をもつて農作物を作つた。棉花は彼の小供達の手によつてつみとられ、娘は母に助けられて棉花を梳いたり、紡いだりした。主人は男の小供達と共にそれを織つて布をこしらえた。こういう構造をもつた Domestic system はやがて變化して、原料の所有權は彼等農民の手をはなれて、商人や媒介人の手にうつつた。生産者は生産手段を自ら有し、それを用いて彼の家に於て労働した。媒介人や商人は農家や地方市場に行つて原料を買い集めて(羊毛、棉花等)、各村落に常置してあるエイジェントの手を通じて小生産者たる農村に分配し、それで絲を作らせ、その絲を集めて更に織手を探してその絲を供給して織物を作らしめ、その織物をまた自分の手に集めた。媒介人はその集めた織物を商人に賣つた。かゝる過程を経て媒介人や商人が漸次小生産者を支配するに至つた。また H. See の「資本主義の起源」(H. See, Les Origines du Capitalisme moderne, p. 186) によると、イギリスでは十五世紀以來商人にして生産を支

配する所の商人兼製造業者 (marchands-fabricans) が發生して、これが羅紗の製造を支配して、農村の小生産者に原料、織料を供給し、その代りに生産物を提出せしめ、これを遠方の市場に高價に賣り捌いて非常な高い利潤を獲得した、と述べている。アイルランドに於ても Alster の織物工業に於ては最初は小作人が織物を生産し、それをダブリン (Dublin) の市場に自ら賣りに行つたのであるが、十八世紀になると、これらの織物生産者は marchands-fabricans に隷屬するに至つた。フランスに於ても農業が繁榮したフランドルの地方、オート・ノルマンディ等のをぞいて、商人達は手工業者に原料、資金、生産手段を供給して彼等を支配した。(H. See, 前掲書、p. 186 以下)。以上ロシア、ドイツ、イギリス、フランスの例によつても明らかのように、農村手工業生産はある一定の發達段階に於ては商業資本に全く支配されるに至る。

かゝる傾向は單に農村工業に於てのみならず、都市の手工業もやがて商業資本の統制下に屈せざるをえなくなつてくる。都市手工業の商業資本による支配が農村より遅れたというわけは、都市の手工業には Zunft (手工業同業組合) があり、これが嚴格なる組合強制 (Zunftzwang) によつて、個々の手工業者の自由を束縛していたからである。また商業資本も最初の中はツンフトの如き組織をそのまま利用した方が得策であつたので、むしろツンフトを保存するという方法を

取つた。しかしながらツンフトは一つの獨占的組織であり、嚴格にしてしかも煩雜なる組合の規則があり、その規則のために新らしい生産方法や新しい技術の採用を常にさえぎつていた。従つてツンフトは常に保守的、反動的であつた。中世以來、殊に世界市場が発生して以來の手工業的生產方法の發達による生産力の増加にとつて、かゝる獨占的保守的組織は當然崩壊せざるをえなかつた。生産力の發達に應ずる法律もこのツンフトが固守した所の保守的規則を次から次へと破つたのである。例えば従來組合強制によつてきめられていた徒弟や職人の數の制限も、法律例えは一七二二年のプロシヤの勅令の様な法律によつて打ち破られ、その他女性が手工業に従事する權利、その他従來認められなかつたものを國家の法律がこれを強制するに至つたのである。一方では巨大な商業資本が手工業を支配するに至り、かくて保守的ツンフトが維持しえられなくなつたのは當然である。Soltauの云う如く、一般に云つてツンフトやギルド等の中世都市の組織はなお生存を續けたが、その力は弱まり、それ等から脱する手工業の數は漸次増加して、それは當時の手工業にとつては大きな打撃となつた。そのために十八世紀の中頃までにはツンフト以外の都市の自由手工業者は勿論のこと、ツンフト自らもこの商業資本の前に降伏せざるをえなくなつた。従來はツンフトの親方が生産品を市場にはこんで販賣していたが、それも遂に商人の手に握

られ、商業の覇權のもとに支配されるに至つた。例えば獨逸では一七〇〇年代の終り頃にはアウグスブルグ、リューベック、ストラスブルグ、アーヘン等の諸大都市のツンフトは完全に商人資本の支配下に歸してしまつた。商人はこれらのツンフトの親方達に原料を供給し、資本を貸與し、その代りに生産品を自己の手に集めて、これを有利に販賣した。前貸制度 (Verlags-system) が成立し、商人はツンフトの親方や手工業者一般の Verleger (前貸人) となつたのである。「商人は最早出來上つた商品を賣買するだけでは満足しえなくなつた。彼は原料を買い入れ、これを彼に依存している所の小生産者たちに供給し、しかして彼等の生産過程をも支配するに至つた。従つて彼の資本の循環は G-W...P...W'-G の形態を取り始めた。それにもかゝらずなお當時に於ては生産はやはり流通に對しては、第二次的なものと思はれた」(ローゼンベルグ、經濟學史、直井武夫譯、一五二頁)。

商業資本の優位は十八世紀に完全に確立された。しかしなお小生産手工業は依然として未だ各人の家に於て散在的に行われ、器具、道具等の生産手段も大部分は各生産者の所有に屬していた。そして外觀的にはなお各自獨立の存在であつた。ただ目に見えない商業資本のみがそれらの手工業を支配しておつたにすぎぬ。こういう形態から、一つの仕事場にそれらの多數の手工業者

を集めて、それら手工業者を部分的賃銀労働者 (Stücklohnarbeiter) として資本主の有する生産手段を用いて生産する形態、すなわち工場制手工業 (Manufacture) へ轉化するのはほんの僅かの時間を要するばかりであつた。マヌファクチュアは分業にもとづく協業のことである。

マヌファクチュアは最初は單純協業から出發する。單純協業に於ては同一資本のもとに、同一資本家の手によつて多數の労働者を同一場所に於て同時に使用し、従つて労働過程の擴張によつてより多量の同種の商品を生産する經營形態である。しかしこの單純協業のもとでは労働過程の質は變化せず、依然として手工業であり、生産手段を失つた専門的の手工業者を同一職場に集合させ、労働力は資本家の生産資本の一要素となり、彼等の生産物は資本家の商品資本となつたけれども、労働そのものは變化せず、資本に對する労働の關係は形式的從屬にすぎなかつた。然しこの單純協業に更に分業が加わつてマヌファクチュアとなると事情は根本的に變化してくる。労働過程は分解し、分解された部分的労働に對する労働者の束縛が強化されて、労働は部分的労働 (Stückarbeit) となり、従つて労働者はマヌファクチュア以外では働きえなくなり、資本に對する労働の關係は實質的に隷屬化するに至る。マヌファクチュアに於ける労働者は資本の所有物たる烙印をおされるに至る。労働者は獨立的農民または手工業者から、資本への外觀的從屬者とな

り、更に一轉して資本に隷屬して労働力を賣る以外には生きてゆく道を發見しえなくなつた。かくて労働力の商品化が進化してゆく。このマヌファクチュアを支配したのは商業資本であり、商人であつた。「マヌファクチュアの生れたのは古いギルド制度の胎内に於てではなく、近代的作業場の主人となつたのは商人であつて、ギルドの親方ではなかつた……」(マルクス、哲學の貧困)。マヌファクチュアは商業資本の發展の最高段階であり、同時に、商業資本が産業資本へ轉化する最初の段階をなした。この商業資本の最高發展段階に於ては、資本の循環はその原形態である $G-W-G'$ から $G-W \cdot P \cdot W-G'$ の形態をとるに至つた。商業資本は流通部面のみでなく生産の部面にも力をのばして來たのであるが、にもかゝらずこの段階では生産は流通發展のための條件とされ、生産は副次的なものであり、流通こそが富の源泉であると考えられていたのである。だから當時奨励された生産は輸出を目的とする部門、すなわち一方では外國市場の獲得のため、他方では國內に貨幣をはこび込むために役立つ部門であつた。マーカンティリズム (Mercantilism) はかゝる商業資本時代のイデオロギーである。すなわち、マーカンティリストは流通をもつて貨幣の集積であるとし、貨幣を物神化し、貿易額による金銀の流入に努力したのである。

中世的生産關係の内部にその反對素として發生した商業資本の力は、その封建的關係を崩壊せしめつつ發展して來たのであるが、かゝる基本的經濟關係の變化はまた必然的に政治關係をも變革せしめた。商品生産の發達、市場の擴大による商業資本力の強化は商人というものを一つの階級、商業ブルジョアジーに結成せしめたのである。この商業ブルジョアジーは、中世都市に於ては商人ギルドを結成し、その中の資力の大きなものがこのギルドの中心となつて、ギルド内部に政治的勢力を扶殖して、王や領主に多額の金錢を贈り、または前貸をして、その結果、王や領主のもつておつた都市税徴收權を獲得して、商人ギルドを中世都市の公共の機關にまで轉化せしめたのである。商業ブルジョアジーは都市行政の中心となり、この過程は商業ブルジョアジーがギルドやツンフトの支配を完全に支配するに至つて一層強化するに至つた。中世都市はその結果として王や領主から完全に獨立するに至つた。今ドイツの例を見ると、ドイツにはドイツの皇帝に直屬する帝國諸都市 (Reichsstädte) と各地の領主に屬する地方諸都市 (Landesstädte) の二つが存在し、これらの都市には王及び領主の代表として *Burggraf* や *Schultheis* 等を派遣して、これらによつて都市の行政を行わしめておつた。これらの都市の市民階級は、王及び領主の代表者、家臣、及び *Patrizier* (Patrician) と呼ばれた地主及び富裕な商人だけであり、産業生活を

營む市民の大部分は參政權を有せず、農村における農奴と同じような束縛をうけていた。商業ブルジョアジーが掌握している市當局が王及び領主の代理人達を金力を以て買収し、それらの權力を排除し、自分達の間から市長を任命し、市會を選擧制とした。そして市長も市會も豪商によつて獨占され、ツンフトの親方達はこれらの選挙、被選挙權をもつたのであるが、多數の職人や徒弟階級の大多數のものは依然として政治的自由も權利も持たなかつた。こうして商業ブルジョアジーは漸次政治的權力を己の手に集中し、イギリスに於ては一六四八年の革命では貴族と結んで國王ステュアート (Stuart) を殺し、共和國を建設した。貴族達は、トーリー黨(保守黨の前身)を、商業ブルジョアジー、及び金融ブルジョアジーはフィッグ黨を結成して、二大政黨主義によつて政權を爭奪する慣習を作り、イギリスブルジョアジーの獨裁の端緒を開いた。國家形體もまた變化する。

中世に於ける國家形體は所謂封建國家である。封建時代の富というものは土地所有の形態をもつたが故に、土地所有の大小が權力の大小を決定したわけである。封建時代の土地所有は *Hierarchie* (階層的) 的であり、それに應じて身分 (*Stand*) も階層的になされて、所有土地の大小もまた階層的であつた。階層的身分は王を頂點として、公、伯、男等の貴族及びそれに隸屬する

大小の家臣 (Vasall) があつたわけである。封建的國家は公國の形を取つた。例えばロシアではキエフ、ノヴゴロド、ウラジミール、あるいはモスコイ等これである。ドイツではプロシヤ、ザクセン、バイエルン等の公國がそれぞれ一つの封建國家を形づくつていた。封建制度は封鎖的經濟を原則とするが故に、これらの公國の間、及び王と公國との間には連結及び交通が少く、それぞれ獨立的封鎖的單位をなしていた。しかし封建制度内部に於て商品生産が發達して、各地方間の交換がなされて地方的市場が全國的市場に擴大するとともに、かゝる封鎖的の分立は漸次全國的統一にむかつて來た。商品生産、商業の發達は分立を好まず、其等の全體的統一を欲求するに至つた。そしてその場合に統一の中心をなしたものは所有土地の大きい、従つて武力も強大である公國が中心となつた。ドイツに於けるプロシヤ、ロシアに於けるモスクワがそれである。その中心國の王が全體國家の君主となり、そこに集權的國家と軍隊と官僚制度と警察機構が出來上り、此が中世末期の所謂絶対主義 (Absolutism) または絶対王制 (Die absolute Monarchie) 國家を生んだ。K. Kautsky によれば、絶対主義すなわち國家權力の支配階級からの獨立、國家權力が直接に階級支配の手段ではなくして外見上は黨派が階級を超越した獨立の存在であるかの如き國家形體は、社會生活の中で基本的な諸階級がそれぞれ互に均衡を保つており、従つてどの

階級も國家權力を自分達に奪い取る程強力でない所に成立するのである。國家權力はかゝる關係のもとでは存在する諸階級を他の諸階級で抑壓し、すべての階級に休戦、政治闘争の中止を命令し、そのすべてを隷屬させることが出来る (K. Kautsky, Die Klassengegensätze im Zeitalter der Französischen Revolution, 邦譯、日高明三、一九一〇頁)。絶対主義國家は封建國家からブルジョア國家への轉化の過程に發生した政治的形態であり、従つて兩形態の國家の支配階級である王、貴族、官僚、商業ブルジョア等が併存した。絶対主義王制は沒落してゆく封建制度の支配階級と、勃興せんとしつつある資本主義制度の支配階級とすなわち貴族とブルジョア等が互に均衡を保つ様になつたという事情から發生し、形式的には兩階級の利害を代表したものであり、従つて下層の人民階級を封建的搾取の悲惨な状態になげ入れたばかりでなく、同時に資本による搾取の中にも投げ入れたのであり、結局絶対王制は搾取一般の權化となつた。これを商業資本の立場から見れば、市場の擴大を意味する所の王を中心とする全國の統一化は商業資本にとって有利であり、従つて商業資本は絶対主義のもとに於ては王及び貴族と聯合して自らは第三身分となつて、それらと一緒に商業資本の利益のために貿易産業の發展を目的として國家機關を利用したのである。また高利貸資本は小生産者及び封建的所有に對して崩壊的作用を及ぼしたのであるが、國王

の権力に對しては有用な働きをなしたのである。貨幣資本家達はこの王や貴族の銀行家となつた。従つて中世の双生兒である高利貸資本と商業資本とは絶対主義を支える二つの大きな柱であつた。しかし商業資本の制覇はやがてこの均衡をやぶり、イギリスにては一六八八年のクロムウエルの大革命、フランスにては一七八九年のフランス大革命、十七世紀のオランダのハブスブルグ家に對する闘争に於て、それぞれ封建的勢力を破り、絶対主義國家をブルジョア國家に轉化せしめた。この闘争の主力となつたのは商業および高利貸ブルジョアジーであつた。

第三節 産業資本の成立

産業資本の循環過程の出発點は貨幣資本として現われ、その貨幣資本は資本として作用すべき貨幣として、一定種類の商品、すなわち生産手段と勞働力とに轉化される。生産過程がこれに續くのである。この生産過程に於ては何等價值形體の變化はふくまれぬ。價值は依然として商品である。けれども生産過程に於ては第一に商品の使用價值が變化され、第二に勞働力の作用によつて價值が増加されるのである。その商品は剩餘價值分だけの價值を増加された商品として生産場所を去り、第二のそして最後の形態の變化をうけて貨幣に轉化される譯である。であるから資本の循環過程は $G-W$ 及び $W-G$ とさう流通界に屬する段階と、生産過程…… P …… という生産界とに屬する段階とに分れる ($G-W \cdots P \cdots W-G$)。資本は流通界に於ては貨幣資本及び商品資本としてあらわれ、生産界に於ては生産資本としてあらわれる。これら一切の形態を通過する資本が産業資本 (Industrielles Kapital) である。だから貨幣資本、商品資本、生産資本と云うのは、この場合各々獨立の資本種類をなすのではなくして、産業資本の諸々の特殊態を形成

するにすぎぬ。

こういう特質を有する産業資本は商業資本とは次の點にて異つてゐる。すなわち商業資本の純粹な形態は、同一の商品を利益を得て販賣するために商品を買入れるという點にある。これに反して産業資本の純粹な形態は商品が加工された形態で販賣するために商品を買入れること、従つて原料等の買入れ及びその原料を加工するための労働の買入れである。また商業資本は直接には價值及び剩餘價值の何れをも作り出さない。唯それは流通の期間を短縮せしめることに貢献する限りに於てのみ、間接に産業資本の生産せしめた剩餘價值を増殖する助けとなりうる。それに市場の擴大を助け、諸資本間の分業を媒介し、資本がより大きな規模で働らくことを得しむる限り、その機能によつて、産業資本の生産率及び蓄積を促進する。また商業資本は流通期間を短縮せしめる限り、前貸資本に對する剩餘價值の比例である利潤率を高める。それはまた貨幣資本として流通部門内にとじこめられる資本部分を小ならしめる限り、直接生産上に充用される資本部分を大ならしめる。そして商業資本の存在とある程度に於ける發達とは、それ自身産業資本の歴史的前提及び條件をなす。しかしながら商業資本はその本質上一定の限界をもつてゐる。十六、十七世紀に於て商業の突如たる擴大と新らしい世界市場の發生とは、舊生産方法の滅亡と資本主

義的新生産方法の勃興の上一つの壓倒的影響を及ぼしたのであるが、これはむしろ徐々に發達しつつあつた所の資本主義的生産方法の基礎の上に行われたものである。世界市場はそれ自身資本主義生産の基礎をなしている。が他方に於ては常に擴大される所の規模で生産しようとする資本主義的生産方法の内在的必然性はその世界市場を更に擴大せしめる刺戟となる所のものである。この場合に於て商業が産業を革命するのではなくして、むしろ産業が商業をたえず革命してゐることになる。商業支配は今や大産業の諸條件が多かれ少かれ優勢となるということに伴われる。例えばイギリスとオランダとを比較するならば、オランダが支配的な商業國民として滅亡するに至つた歴史はすなわち商業資本が産業資本のもとに従屬するに至つた歴史にすぎないのである。商業資本の一切の發達はますます交換價值を目的とする性質に與え、かくして諸生産物をますます商品に轉化せしめる作用をなしてゆく。しかし商業資本の發達ということは、これをそれ自身として考えるなら一つの生産方法から他の生産方法への轉化を媒介するのには不十分である。近代的資本主義的生産方法はマヌファクチュアの時代に於て、その條件がすでに作り出されてあつた所のみ發達し得た。われわれはすでに商業資本の發展につれて、産業資本化しつつあつたこと、それがマヌファクチュアの段階に於て高度に達したということについては既に述べ

た。しかしそのマヌファクチュアという形態それ自身が一定の限度をもち、もり上つてくる生産力に應ずることが出来なくなつてきた。マヌファクチュアは當時までの生産形態としては最高のものであつたのであるが、そのマヌファクチュア的生産形態は當時の生産一般から見ても、量に於て未だ支配的ではあり得なかつた。都市には手工業者が農村では家内工業がなお多量に残存していた。すなわちマヌファクチュアは當時の社會的生產を全體的に包攝し得なかつた。のみならずそのマヌファクチュアは本質的には手工業であつて、商業資本の力によつて擴大され集中された大市場からの欲求に應ずる程に大量的生産力をもつていなくなつた。そこに手工業の基礎の上になつたマヌファクチュアの限界が生じていた。一言でいふならば、資本主義的生產への發展に對してマヌファクチュアは一つの矛盾となつた。この矛盾が突破されなければ、家内工業から前貸制度、更にマヌファクチュアへと發展し來つた資本主義的生產への動向は自己を完成し得ない。この限界の突破、この矛盾の解決、この障害の排除は機械の發明、及び採用によつて始めてなされた。すなわち産業革命がこの大きな役割を果したのである。レーニンは産業革命を規定して「産業革命の時代は大機械工業がヨーロッパに出現し始めた時代であり、機械の影響のもとに全社會關係の急激な變革が行われた時代である」といつている。産業革命はマヌファクチュアから

機械生産への移行を完成せしめ、資本主義的生產方法の完全なる勝利をもたらした。前述した如くマヌファクチュアは分業に基づく協業である。従つてマヌファクチュアは労働の過程を最も簡単な諸作業に分解し、その結果分解された作業を行う所の分化した器具を必要とするに至つた。そしてこの器具を人間の力で動かすのではなくして作業機(Werkzeugmaschine)として動力機、配力機との組合せに於て動かすものが機械である。これらの機械は従つて文藝復興以來發達し來つた科學、特に中世の末期十七世紀以來發達してきた所の精密科學、數學、機械學等の發達によつて準備されたのである。だから機械の發明の技術的可能性は既にマヌファクチュアの段階に於て與えられてきた。そして前述したマヌファクチュアと資本主義的發達との間に矛盾が大となり、その解決を迫られるに及んでこの機械の發明は可能性と同時に必然性、現實性を與えられたのである。この機械の發明及びその採用が最初に現實化したのはイギリスであつた。イギリスは産業革命の祖國となつた。イギリスに於ては一七五〇年から一八五〇年の間主たる工業的、機械的發明が行われ、それが廣く採用された結果、社會的變化が一般化した。しかしイギリス工業の發達は新らしい發明より既に長い前に、既にかゝる變革への道ならしが漸次行われつつあつた。第十八世紀の始めに、工業は農業に代つて漸次國家經濟の基礎となり始めつつあつた。ディフォ

一 (Defoe) は、一七二〇年に新しい工業の基礎の上に新に建設された都會、又村落から都會へ發展した例としてマンチェスター (Manchester)、バーミンガム (Birmingham)、シェフィールド (Sheffield)、リーズ (Leeds)、ハッソマックス (Halifax)、ウエークフィールド (Wakefield) 等の大都會をあげている。

第三章 生産手段の變革—産業革命

第一節 産業革命の意義

フリードリッヒ・エンゲルスはその著、「アンティ・デュロリング」において次のように書いている。「フランスにおいて革命の嵐が全土を吹き荒んでいる間に、イギリスにおいては静かた、しかしそれに劣らない狂暴な變革が進行しつつあつた。蒸氣と道具を製造する新機械とは、マヌファクチュアを近代的大工業に轉化せしめ、全社會の基礎を變革せしめた。マヌファクチュア時代の遅々たる發展の歩みは、生産上の眞の Sturm und Drang 時代に變つた。たえず増加する速力をもつて、社會は大資本家と無産プロレタリアとに分裂した。」

機械の發明、その利用にはじまり、封建制度の社會から資本主義の社會への變革を完成せしめたこの Sturm und Drangこそ産業革命である。産業革命の經濟史上にもつ意義は、單なる機械や動力の發明にあるのではなくして、それを契機としてなされた全社會制度の變革にある。産業革命は、エンゲルスの言葉を借りれば、「經濟力の重心を全然轉位せしめた」點に、レーニンによれば、全社會關係の急激な變革がなされた點に、その歴史的重要性をもつのである。

産業革命は機械の發明およびその生産への利用から發足した。しかし、機械一般の發明および利用が産業革命を惹起したのではない。ウィリス (Willis) によれば (A. P. Usher, A History of Mechanical Inventions, p. 66)、「すべての機械はいろいろの方法で結びつけられた一連の諸部分片から成り立ち、そのうちの一つが動かされれば他のすべてのものが、連結 (connection) の性質に支配されて、作用 (motion) をうける」。またルロー (Reuleaux) によると、「一つの機械は諸抵抗體 (resistant bodies) の結合 (combination) であり、その結合は、それら諸抵抗體によつて自然の機械的 (力學的) 諸力 (mechanical forces) が一定の決定的作用 (by certain determinate motions) を伴つて動かさるを得ないように組合わされているものである。」と規定されている。かくのごとく規定される機械なるものは、その簡單なるものはすでにキリスト紀元以前からエジプト、インドをはじめ、ギリシヤ、ローマ、アレキサンドリア時代から存在した。(Usher, A History of Mechanical Invention, Chapter IV, p. 66)° アッシヤは、エジプトの shadow' インドの picotah としうはねつるべ、アラビアの單檣起重機 (crane with a single mast)° エジプト、ギリシヤの複檣起重機 (crane with two masts) などの例を擧げている。また水力を利用し、織物を自動的に製織する機械はすでに第十六世紀に存在し、第十七世紀の中葉には水力を動力とす

るリボン織機 (ribbon loom) が利用されている。しかもこれらの機械の出現は産業革命をおこさなかつた。したがつて産業革命の契機をなしたものは機械一般ではなくして、特殊な条件をもつた機械でなければならない。

手工業において、多數の労働者が、資本の支配のもとに一緒に計画的に協同し、しかもかれらのおのおのが同一の仕事を行つる單純協業 (Einfache Cooperation) から、分業を基礎として多數の労働者が一緒に相異なる作業を行つるマヌファクチュアへと發達するにつれて、その労働過程は極めて單純な部分的作業に分解して行き、それにつれて労働要具も細分化し、單純化する。そして各労働者はその細分化し、單純化した同一道具をもつて絶えず同一の作業を機械的に反復する。マヌファクチュアがかゝる高度の段階に達したときに、すでに機械の可能性があらわれ、この人間の手によつて使用された労働要具が、人間の手から機構、すなわちメカニズム (Mechanism, mechanism) に移れば、そこに機械があらわれる。この一つのメカニズムの中における道具が道具機 (tool machine, Werkzeugmaschine) であり、この道具機は、全メカニズムの動力となる動力機 (motor machine, Bewegungsmaschine) および動力を動力機から道具機に導くところの導力機 (Transmissionmaschine) とともに、機械の全機構を形成し、みずからは直

接に労働対象に働きかける役割を持つ部分である。この道具機はしたがって機械化した道具に他ならない。いままで人間の手によつて動かされた錐、足で踏む旋盤、鉋、小刀、槌などの道具 (tool, Werkzeug) は、機械化されて、それぞれ穿孔機、機械旋盤、機械鉋、截鐵機、氣槌という道具機 (tool machine) となつたのである。そして「第十八世紀の産業革命の出発点となつたものは實にこの道具機である」(資本論)。マルクスはいう、「産業革命の端緒となる機械は、単一の道具を取扱う労働者の代りに、同一また類似の多數道具を同時に操縦し、且單一の動力——如何なる形態のものであるにせよ——によつて運轉されるところの機械をもつてするものである。ここに始めて機械が成立する」。またエンゲルスも「ブルジョアジーはこの狭少な生産機關を強大な生産力に變ずるためには、是非とも個人的な生産機關を、多人數の協力によつてのみ使用される社會的の生産機械に變ずる必要があつた。そこで糸挽車、手織機、金槌などの代りに紡績機械、織機、蒸氣槌が現われたのである」(反デューリング)といつてゐる。

かゝる機械化された道具即ち作業機が大きなメカニズムの一部分となつて動く機械の製造がこの時代になつて發明された理由としては、第一に過去の古い時代からの科學の集積された業績の結果である。アッシャーは前掲書において、キリスト紀元前における機械製造、西暦前から西暦

一五〇〇年頃までの水車 (water wheel) と風車 (windmill) の發達、水時計 (water clocks) と機械時計 (mechanical clocks) 中世においてはレオナルド・ダ・ヴィンチの技術と發明、印刷機の發明、西暦三〇〇年——一八〇〇年までの織物工業用機械、一五〇〇年——一八〇〇年までの自鳴鐘 (clock) 及びクロノメーター (經線儀 chronometer) の發明をあげている。これらの過去の偉大な歴史がなかつたならば、十八世紀の終りに突如としてかゝる機械製造の發明がなされるという事はなかつたであらう。ウインデルヴァンドが「自然科學はルネッサンスの人文主義 (Humanism) の娘だ」といつた通り、殊にルネッサンス (Renaissance) 以來の科學及機械學の發達に負うところが多い。しかもかゝる科學の發達が一八〇〇年の後期において産業革命となつて現實化したことは、かゝる技術的理由のほかに、第二の、そして決定的な理由として社會的、經濟的理由があげられなければならない。すなわち市場の世界化に伴う商品の需要に、マヌファクチュアや家内工業的組織のもとにおける技術が應じ切れなくなつたということである。「アメリカの發見、アフリカの廻航は、新興のブルジョアジーのために新しい天地を作り出した。東印度および支那の市場、アメリカの植民、植民地との貿易、交換手段および商品一般の増加は、商業に、工業に、航海に未曾有の飛躍をあたえ、それによつて崩壊しつつあつた封建社會内部の革

命的要素に、急激な發達をあたえた。従來の封建的、ツンプト的工業經營法は、もはや新しい市場とともに増大する需要に應ずることが出来なくなつた。マヌファクチュアがそれに代つた。ツンプトの親方は工業的中産階級に押しつけられた。いろいろのギルド間における分業は單一工場内の分業の前に消滅した。しかるに市場はますます擴大し、需要はますます増加した。マヌファクチュアも、もはやそれに應ずることが出来なくなつた。そこで蒸氣と大機械が工業的生產を革命した。マヌファクチュアの代りに近代的大工業が起り、工業的中産階級の代りに産業的大富豪、近代ブルジョアジーが擡頭した（共產黨宣言）。マヌファクチュアの時代においてその可能性をあたえられた機械が、この決定的な社會的、經濟的原因によつて、必然性に轉化したのである。すなわち、産業革命は、擴大強化され來つた商品流通とマヌファクチュア及び家内工業に表現された生産方法との矛盾を解決したところに大きな意義を持つのである。

機械が、より大量的に生産するためには一つの機械装置にとりつけられる道具機がより精巧になることと、その道具機を可能なかぎり多量にとりつけることが必要である。そこに動力の問題が起つて來る。従來動力としては家畜（主として馬、三三、〇〇〇封度の重量を一分間に一呎上げる力—一馬力、horse power）人、水、風が使用された。第十五、十六世紀における主たる

動力機は、水車、風車であつた。ヴェルサイユ宮殿の噴水の動力となつたマリーリー（Marily）の動力機は、十四基の水車よりなり、七十五馬力を出したといわれる。しかしながら、これらの自然動力は、その動力の強さに一定の限度があるばかりでなく、地理的に制限され、また人間の意思以外の自然に支配されるという缺點をもつていた。また固定的であり、移動が不可能であり、したがつて一所に集中せしめるということは不可能であつた。機械の發明はここに強力にして、しかも人間の統制しうる新しい可動的な新動力機を必須ならしめるに至つた。十六世紀から十七世紀に入るとともに大都市の水道工事および鑛山業における採掘がポンプの必要を要請した。アッシャーは「十六世紀および十七世紀におけるより新しい動力の問題は主としてポンプおよびポンプ作業に關したものであつた。そしてこの場合、この問題は一つの解決に達した。すなわち蒸氣機關において最後に發見された新動力源は、この分野において發達し來つた機械的および科學的諸原則の應用であつたのである」。かくて新動力機としての蒸氣機關が前面に現れて來た。蒸氣の氣壓を利用する装置はすでにアレキサンドリアのヘロン（Heron of Alexandria）によつて知られていた。カルダン（Cardan, 一五〇一—一五七六年）、ポルタ（Porta, 一五三八—一六一五年）、ソロモン・ド・ノー（Solomon de Caus, 一五七六—一六三〇年）、サマー

サット (Somerset)、サヴァリー (Savery) などすぐれた科學的氣壓理論および實驗ならびに實地應用を経て、ニューコメン (Thomas Newcomen, イギリスの錠前師、一六六七—一七二九年) にいたつた。ニューコメンは一七〇五年コーレー (John Cawley) と協力して氣筒 (シリンダー) とピストンとを組合せ、汽缸を分離した蒸氣機關 (Newcomen Engine) を發明し、特許を得た。ニューコメンの業績についてアッシャーは次のとき高き評價を行つてゐる。「ニューコメンの氣壓機關の發明は蒸氣機關の歴史においてもつとも偉大なる綜合 (synthesis) の單獨なる行爲であつた。ワット (Watt) および同時代人の重要な仕事は綜合的であるよりも批判的であつた。それより後新しい考案がなされなければならなかつたけれども、それらは要するにニューコメンの機械にたいする諸改良であり、それらの諸改良はニューコメンのそれよりもより偉大なる業績としては評價されえなす」 (Usher, *ibid.* p. 308)。ニューコメンにつづいてワット (James Watt) が現れた。ワットの蒸氣機關は最初の單純作用式のものから、一七八一年および一七八二年の「往復運動から廻轉運動を生じ、蒸氣がピストンの兩側に交互に作用する」ところの複作用式機關に發展した。この複作用式機關こそ、「ワット生涯中の業績の中で最も卓越せるもの」であつた。かくて新しい作業機を有する機械装置の新しい動力機として蒸氣機關が出

現したのである。

この蒸氣機關が工場を中心となり、二つの形態の機械制的經營がなされる。一つは同一種類の作業機が多數に共同作用する場合、すなわち多數の同一作業機による單純なる協業 (Einfache Kooperation) であり、多くの同種の機械の協業 (Kooperation vieler gleichartiger Maschinen) であり、他の一つの型は同一の労働對象が順次に幾多の互に連結された異種の作業機を段階的に通過して完成生産物が生産される場合である。これが固有の意味における機械體制 (Maschinen-system) である。前者は、例えば、同一の紡績機が多數共同的に作業する紡績工場、多數の同一織機が共同的に作業する製織工場のごときがそれであり、紡績、製織、漂白、染色などが一貫して行われる全體としての繊維工業のごときは後者の例である。工業の發達は、前者から後者へ向う。第一次ヨーロッパ大戰後より今日まで行われてゐる conveyer (傳送帶) による流れ作業 (Fließarbeit) を中心とする産業合理化經營 (Rationalisierung) のごときはその典型的のものである。道具の發達は道具を作る道具の出現によつてはじめて最高度に達しうる。それと同じく機械の完成は、機械による機械の生産がなされなければならない。機械發明の初期には機械は手工業、マヌファクチュアをもつて生産せられ、機械をもつては生産出来なかつた。なぜなら機械による

機械生産には、製鐵工業、製鋼工業、強力なる動力機關、各種の鐵鋼鐵を對象とする作業機の發達を前提とする工作機械 (machine tools) の發達を必須とするからであり、ドップ (Dobb) のいわゆる第二次産業革命 (第一次革命は紡織業方面、第二次革命は鐵工業方面における機械の發明) をまたなければならなかつた (Dobb, Development of Capitalism)。そしてかかる第二次革命の實現が可能となるがためには、科學、ことに技術學の一層の發達を必須としたのである。

アッシャーの叙述をかりれば、十八世紀の終末まで工業機械の大部分は木材製であつた。金屬細工の技術は中世においてかなりの發達を示したが、しかし金屬の生産量もすくなく、その技術も一般に普及していなかつた。金屬化合物についての化學の知識も十分でなかつたので、金屬工業はなおいまだ實驗の範圍を出でなかつた。十八世紀末にいたつて、ようやく鐵の精鍊ならに加工法が、作業機、蒸氣機關の發明、作業機や蒸氣機關に對する増加する需要に促されて發展し來り、その結果鐵及び鋼の新らしい利用法が發見され、やがて鐵製の工業用機械が製作されるようになった。かかる事を可能ならしめたのには新らしい製鐵法が發明され、スミートン (Smear-ton) の衝風爐 (blast furnace)、コート (Cort) の鍛鐵のための精鍊壓延工程の發明、蒸氣機關の製鐵業への移入、九十年後における新製鐵方法、一八二八年ネイルソン (James Neilson) の

熱風法 (hot blast)、一八五五年ベッセマー (Bessemer) 法、一八六四年オープン・ハース (Open hearth) 法、一八七五年トーマス、ギルクリスト (Thomas, Gilchrist) の基性法 (Basic Process) の發明されたことである。その結果、初期の工作機械の中で最も重要な旋盤 (lathe) と中割り盤 (boring machine) の顯著な發達となり、それによつて「換えうる部分品の製作」(inter-changeable parts) — 完全な機械を組立てることの出来るような精度を持った部分品の製作 — が始めて出来るようになったからである。「大工業は、その特質的の生産機關たる機械それ自身を掌握し、機械をもつて機械を生産するに至らなければならぬ。そこに至つてはじめて大工業は自分自らに適應した技術上の基礎を造り出し、自分自らの足を以て立つに至つたのである」(資本論、第一卷、第四編第十三章)。

かくて、エンゲルスのいうごとく「蒸氣と機械をつくる機械」の發明が産業革命をひきおこしたのである。そしてその革命こそ、封建制社會制度をくつがえし、資本制社會制度を開幕させたのである。

分業が支配的なメカニズムのもとでは、生産方法の機械化は必然的に連結的に行われる。ある一部分の機械化は他の部分を機械化し、かくて全メカニズムを機械化しなければやまない。一つ

の工作機械の發明は、まずそれと連關する作業の他の工作機械を生む。新しい工作機械は新しい作業機の出現を呼び、新しい作業機はそれと連結する動力機、導力機を變革させる。ある生産部門における一部分の機械化はその一部分が一段階をなすところの全生産行程の機械化を促す。一つの生産部門における新しい機械の出現は、それと關係のある他の生産部門の機械化を必然ならしめる。紡績業の機械化は製織業、漂白、捺染、染色等における生産手段の機械化を呼び起す。工業における機械の導入は、工業に原料を供給する農業(綿繰機その他農業機械)、鑛業その他の原料生産に機械化を要請する。かくて生産一般の機械化が行われれば、生産原料、生産物の運輸手段、交通手段もまた當然に機械化せざるを得ない。全經濟部門はかくて機械化への道を促され、機械なき生産は存在しえない事となつた。産業革命は、かゝる全經濟部門にわたる機械化への革命的發端をなしたのである。「産業革命とは、生活手段の生産および分配のすべての方法を根本的に變革せしめ、したがつてまた社會のすべての經濟的機能を革命したところの諸發明および諸發明によつて過去一世紀半の間に持ち來されたところの偉大なる變化である」とベヤードはその産業革命史のなかで書いてゐる(Beard, Industrial Revolution. p. 1)。

第二節 イギリスの産業革命

かゝる偉大なる役割を人間の歴史の上に演じた産業革命は他のどの國よりも先ず十八世紀末のイギリスに起つた。問題はなぜ最初にイギリスに起つたかである。ノールス(Knows)はその著「The Industrial and Commercial Revolutions in Great Britain during the Nineteenth Century」の第二部第二節でそれを明かにしている。次にその大意を紹介する。

フランスは偉大な工業的傳統と多くの工業人口、海外における商品の大市場をもつていた。またジャッカール(Jacquard)の如き發明の天才、ルブラン(Leblanc)その他の化學における新發明がすでになされていた。フランスの植民地交易はイギリスよりも大きかつた。一七一五年と一七八七年の間にイギリスの外國貿易は四倍したが、フランスは同期間に五倍している。だからもしフランス革命がなかつたとしたならば、アメリカはフランスと友好關係にありイギリスとは敵對關係にあつたから、アメリカのフランスとの貿易は非常に増加したのである。しかしフランス革命の結果、一七九三年にはイギリスとフランスとの間に戦争が起り、イギリスはフランスの

對外貿易を切斷してしまつた。フランスの道路は一七五〇年以來改革され、その他交易の爲めの障害は一七八九年以前にフィジオクラシー的影響のもとですべてなくなつていた。また王、大臣たちも機械を導入するために熱心な努力をなした。フランスではすでに大革命以前に紡績工業の機械化とコークスを使用する近代的製鐵工業が小規模であるが、クルソー (Cressot) に存在していた。しかし大革命による經濟的破壊がフランスの經濟を四十年間おくらせた。一八三〇年にフランスが立直つたときには、イギリスはすでに世界の工場 (Workshop of the world) となつていた。もしフランス大革命がなかつたならば、イギリスではなくしてフランスが産業革命の先驅國となつたであらうと、ノールスはいつてゐる (Knowles, *ibid.*, p. 35—36)。

ドイツにおいては、資本の缺乏、悪道路、國民の偏狹 (parochialism) による企業の貧弱性、内國税による國家の分裂、國內および國外市場の狹隘などのために、産業革命に對する促進力は當時においてはまだ弱かつた。

オランダは當時イギリスに比肩しうる貿易國であつた。オランダは貿易によつて蓄積した大きな資本を持ち、商船隊も大量に存在し、機械の採用を促す人口寡少という條件も具えていた。リッネル工業が盛大であり、インドにその大きな市場をもつていた。しかしそのオランダも當時に

おいてその貿易は漸次下り坂に向いていた。オランダの政治は非常に混亂して地方分權的であつた。獨占的な中世ギルド制度がなお存在し、そのギルドは機械化に反對した。またフランスやイギリスがもつていたような工業傳統もなく、大規模な工場は存在せず、經濟的自由主義も存在しなかつた。また世界の諸原料もフランスとイギリスとが獨占して、オランダはごくわずかな分前しか獲得出来なかつた。だから機械の發明に對する刺戟もすくなく、たとえ機械が輸入されたとしてもその機械を維持して行くだけの原料を手に入れることは困難であつた。

これらの諸國に對比してイギリスが産業革命の祖國となりえた特殊の理由としては、まずこの國における第十八世紀後半における機械の發達をあげなければならぬ。そしてその機械發達は次の諸原因に歸しうる。十八世紀において木材が不足した。それが家庭の燃料として石炭の需要を増加させた。それまで石炭は不健康であるとの理由で一般には使用されなかつたのであるが、この木材の饑饉に直面して石炭を一般に燃料とすることを餘儀なくされ、そのことが石炭鑛業を刺戟した。石炭採掘は坑内における排水を必要とし、そこに蒸氣機關が發明され、そのことはまた石炭の増産を促した。鐵を鑄解するための木炭の不足は製鐵業の發達の障礙をなし、木炭の代りに石炭を使用しても石炭に含有される硫黄分が鐵鑛を脆くする爲めに反つて有害となつた。し

かしのこの障碍は、石炭をコークス化する方法的發明によつて克服され、一七六〇年頃からこの新方法は採用され、そのために石炭に對する需要が激増した。その後一七八四年におけるコーツ法 (Corts process) の採用は製鐵業を革命し、單に鎔解のみならず製鐵業の全行程を機械化し、シェフィールド (Sheffield) では製鋼業 (steel industry) も發達してきた。かゝる製鐵業の發展は他方で石炭と運搬する交通手段の改革を要求し、それは最初はマンチェスター、リヴァプールを中心にして、やがて全土に運河や水路や新式の道路が建設され、水運、陸運が發達した。そしてそれが又製鐵業を促進したのである。廻轉運動をとまらうワットの蒸氣機關の發明は水力よりも、各種の點において優れた動力を提供した。木製の機械は鐵製となつた。鐵製の機械は最初は車輪、ハンマーその他の部分品の鑄造物や鐵工場に使用された。一七八〇年ごろにはイギリスの木綿工場は鐵製の機械を使用していたといわれる。しかもイギリスは石炭を十分所有し、石炭と鐵とは同一地方に存在し、しかも鑛山はウェールズ (Wales)、ノーサンバランド (Northumberland)、スコットランド (Scotland) の海岸近くあつて運搬に非常に便利という好條件を與えられていた。かゝる機械の發達がイギリスの産業革命を必須ならしめたのである。かゝる機械の發達は木綿工業の機械化を促し、木綿の生産を増加せしめたと同時に、交通機關

イギリスの輸出 (單位磅)

	合計	アメリカ	%	アフリカ	インド	%
一七二二—一七三三	七、三五二、六五五	一、〇五三、七三九	一四	一一一、八〇五	九四、一七九	一
一七五〇—一七六一	一三、九六七、八一	一、九一一、七〇〇	一四	二一四、六四〇	七九八、〇七七	五
一七七〇—一七八一	一七、一六一、一四六	五、七四二、五三二	三三	七一二、五三八	一、八四、八二四	一〇

イギリスの輸入

	合計	アメリカ	%	アフリカ	インド	%
一七二二—一七三三	五、八一、〇七七	一、〇四、五六三	二	一一、五一五	九三三、〇一三	一
一七五〇—一七六一	七、九四三、四三六	二、九三、五七六	四	五六、二九二	〇九六、八三七	一
一七七〇—一七八一	一二、八二一、九五五	四、二二五、四七六	三	九七、四八六	一、三三九	一

この表は Knowls の The Industrial and Commercial Revolution in Great Britain during the Nineteenth Century p. 30 による

の發展は國內商業および貿易を盛ならしめ、イギリス商品のための市場は漸次世界化した。イギリスの貿易は一七〇二年—一七九二年の間に價格において四倍化し、船舶噸數は五倍に増加した。イギリスのアメリカ及びインドにおける植民地の發展はこの傾向を一層強めた。一七二二—一三三年の貿易總額 (輸出入) は一三、一六三、七三二磅であり、一七五〇—一五一年は二二、

九一一、二四七磅であり、一七七〇——七一年では二九、九八三、一〇一磅であつて、一七二一——七一年の間に二倍以上となつてゐる。

もともと人口のすくない、しかも労働者を獲得するに困難の立場にあつたイギリスがかゝる世界市場の需要に應ずるためには、どうしても機械化の道に向つて行かざるを得なかつたのである。いまフランスと比較すると、フランスは一七八九年には二千六百万人の人口を有したに對して、イギリスは一七八〇年に九百万人の人口しか持つてゐなかつた。「イギリスの人口は増加する輸出貿易に對處するにはあまりにすくなかつたから、機械は全く不可缺の條件であつた。なぜなら手工業によつてこの激増する需要を満足させるには人口は不十分であつたからである。フランスは二千六百万の人口を有してゐたから家内工業に利用しうるところの労働力は非常に多かつた。フランスは四千萬磅の輸出入貿易を賄うために二千六百万人を有するに拘らず、イギリスは三千二百萬磅の外國貿易を賄うために僅か九百万人の人口しか有たなかつた。」(Knowls, *ibid.*, p. 80.) かくてイギリスは人口がすくなかつたばかりでなく、當時イギリスには纖維工業、鑛山業、製鐵業、道路建設、運河建設、埠頭港灣工事、都市の建築など各種の事業がおこり、労働力が非常に不足した。かくて人口の寡少、労働力の不足はイギリス商品に對する激増する需要と適合せ

ず、それが機械出現に對する大きな刺戟となつたのである。

第三の理由は、イギリスは産業革命による資本主義化のための十分な資本を蓄積してゐたことである。それは第十八世紀中における植民地貿易、インド貿易において巨大な原始蓄積をなしたのである。すなわち植民地からの煙草、砂糖、香料その他の商品、奴隸貿易などを通じて、巨額の資本を蓄積し、その蓄積した資本を石炭採掘や製鐵業に投下して、しかも多くの利潤を期待し得たのである。またフランスは第十九世紀に入つて始めて銀行業が成立したのに、イギリスでは十八世紀において銀行制度が発生し、一六九四年には英蘭銀行 (England Bank) も創設され、資本を有するものが發明家に投資して企業の機械化を行ひうる制度が出来上つてゐたこともイギリスを産業革命の祖國たらしめる大きな原因となつた。

第四の理由は、フランスは、フランス革命前後の政治的動亂、それによる經濟的破壊がそれまで發達して來たフランスの工業化を阻んだのに對して、イギリスでは政治的不安がすくなく、大きな企業に固定資本を投下することになら躊躇する悪い條件がなかつたことである。當時のイギリス人は既に資本の性質を諒解し、大規模生産をよく理解し、そして種子を蒔けば收穫を刈りとりうることをよく知つてゐた。そして政治的、經濟的客觀情勢はそれを可能ならしめるめぐま

られた安定状態にあつたのである。

そのほかイギリスはヨーロッパの外割に存在する島嶼として北部ヨーロッパにたいし、アメリカに對し交通の中間的地位にあるという地理的好條件、水路、道路、運河が一七六〇年代に發達し原料の内地生産地への輸送、生産物の海口への運搬に容易であつたこと、またドイツが一八三四年まで多くの種類の内國税 (inland, internal tariff) のために運輸が阻害され、フランスにも多くの税 (tax) や手数料があり、全國が三大税域に分割されて交易を妨げていたに對して、イギリスがそれらの内國税システムから全く自由であり、一般的に經濟的自由主義が行われていたこと、また十八世紀のヨーロッパ諸國ではまだ農奴として土地に縛りつけられた人口が存在し、物納地代がなされ、都市にはギルド制度が残存していたに反して、イギリスでは第十六世紀末にすでに農奴制度が消滅し、第十八世紀の中葉にはイギリスの住民は全國を自由に移動しうる權利をもち、ギルド制度は第十六世紀には王權のもとに統制され、ギルドの強制はなくなりいかなる機械を採用することも、いかなる職業に従事することも自由であつたこと、第十八世紀には外國特許會社の獨占的特權がなくなつて交易がすべて自由となり、従つてイギリス人は全世界に亘つて自由に貿易するに至り、デイフォー (Defoe) はその著書「Plan of the English Commerce」に

おいて、一言でいえば全世界はイギリスの羊毛製品を着し、全世界がそれを要求し、全世界をあげてその光榮と利益 (Glory and Advantage) を羨望した、と云つたほど盛大になつたこと、以上の諸點も、イギリスが他の諸國よりも早く産業革命を達成することの出來た條件を形成したのである。

次の問題は、そのイギリスにおいて何故に他の産業部門より先にまず木綿工業部門 (cotton industry) におつて機械化が開始されたか、と云ふことである。イギリスにおいて當時もつとも重要な繊維工業は羊毛工業であつた。イギリスは原料としての羊毛を自國で多量に産したばかりでなく、純良なメリノ (Merino) 種の羊毛をスペインから獲得しえた。だから羊毛工業および羊毛を原料とする被服工業は第十八世紀ではすでに資本主義化し、海外にも廣大な市場を持つていた。ウイルトンシャイヤー (Wiltshire)、デヴォンシャイヤー (Devonshire)、グローススターンシャイヤー (Gloucestershire)、ヨークシャイヤー (Yorkshire) などがその中心地であつた。羊毛工業に次ぐものは絹工業であつた。フランスは自國のロレーヌ河谷に絹糸を産しまたイタリアから輸入したが、イギリスは東インド諸島から輸入しさらにアメリカにおけるイギリス植民地から輸入していた。第三の重要な繊維工業はリンネル (linen) 工業であつた。これに反して木綿工業は

當時もつとも振わない部門であつた。その理由は木綿工業の原料である棉花 (cotton-wool) の輸入がすくなく、しかも不安定であつたからである。當時イギリスはレバント (Levant) や西インド諸島から棉花を買つていたのであるが、それらの地方ではフランスの勢力が強かつたがためにそれに制せられて原料としての棉花を獲得することが困難であつた。フランスは大量の棉花を殆んど獨占的に買占めた。したがつてイギリスは、フランスの勢力を破摧して、レバントや西インドを支配しうるにいたるまでは木綿工業は盛大になりえなかつた。かくのごとく一番不振を極めた木綿工業が他の羊毛、絹、麻などの纖維工業を凌駕して一番最初に機械化した理由は次の諸點に存する。

その第一は、七年戦争 (一七五六—一七六三年) の結果である。七年戦争は、一方にはフランス、オーストリア、ロシア、スウェーデン、サクソニーが参加し、他方ではプロシヤがイギリス援助のもとに立つて、七年間相争つたのであるが、主たる對立はイギリス、フランス間の海戦植民地における戦争となり、結果はイギリスの勝利となり、カナダ、インドなどのフランス植民地はイギリスによつて征服せられた。かくてイギリスが制海權を握り、棉花を獲得しうる地位に立ち、戦争の結果棉花の主要生産地であるガデループ (Guadeloupe) 島を得たからである。一八

七〇年に至り外來の棉花の輸入税は低下しリーワーズ (Leewards) 諸島などの西インド諸島などにイギリス人が棉花栽培を奨励し、それを輸入した。かくしてイギリスの制海權獲得、植民政策の發展は、從來すくなかつた原料としての棉花の輸入を増加し、また植民地の土人達はイギリス製の木綿製品を歓迎したことなどによつて、イギリスの木綿工業は盛大となつたのである。毎年平均の棉花輸入量は次のごとくである (Knowls, *ibid.* p. 47)。

一七〇一—一七〇五年	一、一七〇、八八一磅
一七一六—一七二〇年	二、一七三、二八七
一七八一—一七八五年	一〇、九四一、九三四
一七八六—一七九〇年	二五、四四三、二七〇
一八〇〇年	五六、〇一〇、七三二

その後ナポレオンはイギリスの地中海制海權を侵してレバント地方から棉花輸入をはかつてイギリス、フランス間に棉花争奪戰を演じたが、イギリスはその覇權を失わなかつた。かくてイギリスは、レバント地方、西インド諸島、アメリカから多量の棉花を輸入することにより、また他方ではイギリス貿易の世界發展によるイギリス木綿製品に對する需要が激増したことにより、木

綿工業の機械化が促進されるに至つたのである。

第二の原因は、從來イギリスは自國では木綿工業を行ふ代りに、インドの木綿製品を仲繼貿易してゐた。ところが十八世紀の中頃 Mongol 帝國が瓦解し、イギリス、フランスの間にインドの争奪戦が激しくなり、インドからの木綿製品の輸入が困難となり、イギリス商人は、從來の木綿市場を維持するために自國で木綿工業を起す必要に迫られたことであつた。木綿製品を使用していたイギリス婦人は、インドからの木綿製品の輸入が困難となるや、半分棉花、半分リンネルの製品で満足せざるを得なくなり、それがマンチェスターの木綿工業を促進し、機械化させる動機となつたのである。

以上のごとき諸理由によつて、産業革命は、まずイギリスに、そしてそのイギリスの木綿工業部門に、起つたのである。ベヤードは前夜たる一七六〇年代のイギリスを次のように概観的描寫をしてゐる。「産業革命前夜においてイギリスは政治的及び經濟的立場からみれば、農業が最も重要であつた。農業は國民所得の大きな部分を提供し、大地主は大きな行政的政治的權力を有する公の地位を占めた。工場制度はまだ工業に行われず家内製造制度 (domestic manufacture) に

取つて代つてゐなかつた。Deaneによれば、多くの製造業は家庭の消費のためギルドによつて組織されてゐた。そしてその原料が國內の農業の生産物である製造業のみが若干の輸出を見せたに過ぎなかつた。工業には殆んど専門化 (specialisation) は行われてゐなかつた。外國貿易は比較的小であつた。國民や共同體は殆んど自足的であつた。労働者は資本に依存することがすくなかつた。生産は少量のよく知つた需要に應ずる目的を持つてなされたが故に交易は堅實であつた。ほとんどすべての工業に要求される道具類は甚だ簡單であり、したがつて得易く、それを動す動力も大部分は人力であり、したがつて大きな資本の集積を必要としなかつた。その時まで發明されてゐた機械の量は過少評價してはいけないけれども、人間は、自然世界の大きな力を知らなかつたが故に、その諸活動においては大に制限されてゐた。實際第十八世紀の初期のイギリスはまだ中世のイギリス (mediaeval England) であり、靜かであり、原始的であり、貿易や商業の騒ぎによつて亂されてはゐなかつた」(Beard, The Industrial Revolution. p. 22—23)

すなわち一七六〇年代のイギリスの特徴は、原始的農業制度の優勢、粗末な機械的工夫の使用、工業的構造の比較的簡單性、政治及び政府の中世的性格などであつた。すなわち一八六〇年までのイギリスは、そのうちに新しい飛躍と變化の萌芽が漸次大きくなりつつあつたとはいへ、

なお舊制度のうちにあつた。

この舊制度においては、封建社會の繼續として主たる生産はなお農業であつた。ベヤードの記述によれば(Beard, *ibid.*, p. 176)年にイギリスの労働者の三分の一は農業労働であつた。製造工業に屬する労働者の多數も一年のうち一定期間は農業に従事していた。八、五〇〇、〇〇〇の人口のうち三、六〇〇、〇〇〇(四二%)は農村に住み、一一九、五〇〇、〇〇〇磅の全國民所得のうち六六、〇〇〇、〇〇〇(五六%)は農民の收入であつた。そこには多分になおマナー制度の封建的遺制が残つており、三圃制度も残存し、農村は自給であり、連枷(カラ竿, *Rain*)、原始的な鋤、糸繰り機(*spinning wheel*)、手織機(*hand loom*)その他の粗朴な小道具が使用されていた。しかしこうした舊制度のうちにも變革の過程は進みつつあつた。Louis W. Moffit はその著 *England on the Eve of the Industrial Revolution* のなかで次のように書いている。

「人は個人的創意(*individual initiative*)の作用や、新しいところみにたいする餘地のほとんどない農業方法に従うことをだんだん欲しなくなつた。共同體のおくれた、非進歩的な人たちによつて指導される進歩の度合を嫌惡した。商業精神の刺戟のもとに、そしてまた當時の一般的活動のもとにおいて、時と労働の經濟(*economies of time and labour*)を導入して、よ

り多量の食糧を土地から獲得しようとする欲求は、工業のもつ保守性を習慣の束縛から解放する新らしい諸方法の意義と一致した。その結果は、農業共同體の經濟的構造における變化であつた。その變化は新らしい技術の結果であり、その同伴者であつた。新らしい方法は、おのこのマナーがただすべての同意によつてのみ變更られるがとき一つの嚴格な收穫秩序(*one rigid crop order*)に限定されてゐるあつた。ほとんど不可能であつた。むだをすくなくすることは、農民の耕地が廣い範圍にわたる地域の上に散在するストリップ(*strip*)にあり、牧場が共同體の共有財産であるあいだは、ほとんど不可能であつた」(Moffit, *ibid.*, p. 35—)

中世の大土地所有形態であるマナー制度は、農民の反抗(*Peasants' Revolt*)およびその他の經濟的原因によつて漸次解體しつつあつた。農民反抗の直接の原因は、一三八〇年になされた人頭税(*Pool tax*)の賦課であつた。この人頭税は十五歳以上のすべての國民にたいする一人宛三グローツ(*groats*, 1 *groat* = 4 *pence*)を課する苛税であり、したがつて多くの家族を有するものは支拂いえないほどの重い負擔となり、當時からすでに悪税といわれたものであつた。多くの農民はこの悪税の支拂いを忌避したので、當時の権力者は権力を利用して強制したのである。こ

れにたいし、封建制度の末期に窮乏しつゝあつた隸農たちは、この税の賦課を機會として、これに反抗するために數年にわたつて秘密結社を組織し、機を熟するのを俟つた。東部諸州、とくにロンドン周辺の地方に反抗の熱意が強かつた。一三八一年五月にいたつて、遂にエセックス(Essex)に農民の暴動が勃發し、驚くべき勢力で全力に蔓延した。ワット・タイラーおよび僧侶ジョン・ボール(John Ball)に率ゝられたケント(Kent)州人は、ロンドン進軍を敢行した。ランカスター公(Duke of Lancaster)は農民の敵として襲撃され、その宮殿は焼かれ、寺院もまた焼かれ、多くの農民の敵が殺戮された。リチャード二世(Richard II)は狼狽して、ワット・タイラーと面接して、つぎのような農民の要求を納れざるをえなかつた。

- (一) 農奴制度(Villainage)およびそれにかからまるすべての封建的義務及び負擔の廢止、賦役地代の金納地代による代替。
- (二) 一エーカー四片の地代によつて、すべての土地は自由に賃借されうること。
- (三) すべての市場は自由となり、そこにはなんらの制限もなくし、市場税(markettolls)を廢止すること。
- (四) この農民反抗に参加したすべての逮捕された農民の釋放。

東部ではジオフリー・リッター(Geoffrey Lister)が指導者であり、多くの隸農は彼の指導のもとにマナー・ハウス(manor house)を襲撃して、隸農の義務を記載した記録類を焼いてしまつた。この反抗の要求および行動から、この農民反抗は人頭税に對する反對を直接の動機としたが、ほんとの目的とするところは封建制度の基礎であるマナー・システム(manor system)と稱する大土地所有制に對する反抗であつたことは明瞭である。また注意すべきことは、この反抗には單に農民ばかりでなく、中世都市の困窮した多くの住民が参加したことである。アルフレッド・ミルンス(Alfred Milnes)『ギルドより工場』(From Guild to Factory)によれば、「都市においても事態は決して良好ではなかつた。都市プロレタリアートのギルドの金力政治(plutocratic power) 権力に反抗する鬭争はすでに進行しつゝあつた。徒弟(apprentices) 達はいかからの運命につき不平滿々であり、クラフト・ギルド(craftguild)で親方になる希望を失つたヨーマン(Yeoman)やヴァーラー(Valets)たちは、かれらより地位の低い半分饑えた不熟練労働者より、ほんのすこし危険の度がすくないだけであつた。だから反抗が勃發した時には彼等はこれを都市の城壁内において歓迎し、その反亂に貢献した」(Milnes, *ibid.*, p. 140)。「かくて當時都市および農村においては經濟力は人口をその利益が反對である二つの對立する陣營に分裂せし

めた。そしてこの對立を實際化し、それを反抗にまで點火したのがジョン・ボール (John Ball) および托鉢僧 (mendicant friars) の仕事であつた。一方には都市の金持とマナーの領主、他方これに敵對したものは宗教的社會主義のメッセージが豊富な原動力をもつて持ち來された人達であつた」(Milnes, *ibid.*, p. 141)。だからこの農民反抗の社會的意義は最初の全般的な反封建闘争であつたことである。最初王はこの蜂起を恐れてその要求を入れたのであるが、やがて王はこの約束を破り、農民軍に對して攻勢に出で、農民を虐殺し、裁判により農民を處刑した。だからこの農民反抗は表面からみれば失敗であつた。ミルンスはこの農民反抗の特質として二つの點を擧げている。その一つは、イギリス人民の約半分がこの反亂に加わり、かれらは一つの理想のもとに反亂に加わつたことであり、その蜂起は如何に恐るべきものであるかを示したことであり、その二は、一時的にはこの農民反抗は失敗であつたけれども結局は殆んど成功したということである (Milnes, *ibid.*, p. 142)。すなわち農民反抗はそれによつて封建制度崩壞の歴史の上に大きな役割を演じたのである。勞役地代を現金地代に變るべきを主張する農民の運動 (commutation movement) は進行し、多くの領主は賦役を金納地代に變更せざるを得なかつた。農民は結局敗れたが、彼等の團結の力を知つた。力と權力を維持しようとした領主達は殺され、多くのマナー・ハ

ウスは焼き拂われ、農民の勇氣と決意とを知らされた。イギリスの農民反抗はフランスのラ・ジヤックリー (Jacquerie)、ドイツのバウエルンクリーグ (Bauernkrieg)、ロシアのステンカ・ラジン (Razin) の亂などとともに、中世末期における大規模の反封建闘争の一系列をなすものであつた(註1)。

マナー制度は、この農民反抗の勃發、その他の經濟的理由によつて漸次解體し始めた。しかしながら産業革命前においてもなおこの制度は完全には拂拭されてはゐなかつた。開放耕地制度 (open field system)、三圃制度 (three field system)、牧草地 (meadow) や牧場 (pasture) の共有制度はなお各所に餘喘を保つていた。かゝる封建的な土地制度は、いまや食糧の増産、原料としての農作物需要の増加に迫られて來た集約農業 (intensive agriculture) によつて、次ぎの點において障害となりつつあつた。すなわち、かゝるマナー制度のもとでは、全コミュニティ (community) の同意なくしては自由な作物の輪作 (rotation) は不可能であり、土地の多くの部分が野道に徒費され、耕地の共有牧場化は冬耕の餘地をなくし、分散した土地部分の巡耕には無駄の時間を費し、分割された條畝 (strips) についての争論が多く、家畜の共同飼養は家畜の病氣を傳染せしめ種の改良の障碍となつた。要するに、農業のかゝるマナー的方法是、いまや急激な

改革を不可能ならしめ、科學的生産の立場からみれば、非常に徒費的であり、多くの勞働力を必要としたのである。そのために手工業の發達にとつて邪魔物となるに至つた。この矛盾は何とかして突破されなければならなかつた。農業における古い秩序は新秩序に轉化しなければならなかつた。かゝる新秩序への轉化は、まず地代の勞役地代から貨幣地代への變化 (commutation) となつて現れた。一三四九年、一三六一年、一三六九年に起つた黒死病 (Black Death) はロバーツ (D. W. Roberts) の記述 (An Outline of the Economic History of England, p. 15—16) によると、一三三九—一三五一年の間に全人口の三分の一乃至二分の一が黒死病で死亡し、すべての階級がその災害に遭つたがその最大の被害者は農村および都市の勞働階級であつた。その結果勞働者の不足が顯著となり、勞働價格が騰貴し「勞役がまだ貨幣をもつて代納される地方においては、もし領主が農奴を保留することの出来ない時には、その領主直屬地 (demesne) を耕作し能わざるに至つた。農奴は自らを必要不可欠のものたることを自覺して、勞働義務を寛大にすること、また凡ての勞働義務を貨幣をもつて代納することを領主に要求するに至り」(Ashley, The economic Organization of England, p. 50)。更に農民反抗がコンミュティーションを一揆をもつて迫るに及び、十五世紀の中葉にはイギリスの大部分では勞力地代の事實上の消滅となり、之に代

つて貨幣地代が行われるに至つた (Ashley, *ibid.* p. 53)。つゞいて新秩序は土地貸借の條件にあらわれた。すなわち終身借地または數代借地、特に世襲の公簿による借地 (copyhold of inheritance) を意味する傳統的な copyhold tenant (その勞務を登録した裁判所公簿に基いた借地人) や世襲借地 (freehold) から一定期間 (五—二十一年) の leasehold または annual lease (の變化、rockrenting (地主が勝手に地代や貸借期間を決定する権利をもつ土地貸借) の衰微などが徐々に行われた。かゝる變化は、イギリスの富及び人口の増加、および土地耕作の改良の結果として土地の地代價值が上つて來たからである (Moft, *ibid.* p. 48)。アッシュレーによると、十四世紀の後半、十五世紀においてマナーの領主はその領主領を、短期を以つて貸附ける慣習が生じ、その貸附の條件たる一定額の貨幣支拂を ferm (ラテン語では firma) とし、領主領、またはその一部を借りる借地人を farmer と呼んだ。この「十四、十五、十六世紀の farmerこそ近代的借地農業階級の主要歴史的源泉の一つである」とアッシュレーは述べてゐる (Ashley, *ibid.* p. 54—55)。

この時代において大土地所有であるマナーは比較的小さい借地に分割されてゐた (Ashley, p. 55)。ところが第十八世紀に至り、この世紀の農業に関する著しい特徴の一つは、これらの小農

地の形態が漸次大農地に變りつつあつたことである。ジョンソン (Johnson) は、第十七世紀末及び第十八世紀の前半には小土地は危機に瀕したと報告している。すなわち耕地の大きさにおいて變化が生じたのである (Moffit, *ibid.*, p. 47)。

次にエンクロージャ (enclosure) がある。われわれはすでに土地の保有が漸次大となり、大農場における生産の單位が大きくなりつつあつた傾向について述べた。エンクロージャはこの傾向の當然の結果であつた。第十五世紀の後半、エドワード三世の時代にネザールランドから織物の熟練工が渡來しこゝにイギリスに羊毛工業が起つた。この利益ある羊毛工業にとつて羊毛は重要な原料である。それが牧羊業を刺戟し牧羊地に對する要求が強まるにつれて、従來マナーの共有地や開放耕地 (open field) は石又は柵をもつて封鎖され、農地は變じて牧羊場となり、トーマス・モアの『ユートピア』の言葉を借りれば、『羊が農民を喰ひ殺す』に至つたのである。このエンクロージャは最初は農民との合意のもとに行われたが、最後には法律 (Enclosure Act) をもつて強行されるに至つた。このマナー制度の古い開放耕地制を崩壊せしめ、マナーのホールディング (holding) を消滅させたエンクロージャは既に中世の初期、すなわち十三世紀末から行われていたが十八世紀において急激に増加した。一七一〇年から一七六〇年の間に三三

四、九七四エーカーの土地がエンクローズ (enclose) され、一七六〇年から一八四三年の間のエンクロージャは七、〇〇〇、〇〇〇エーカーに達した。

このエンクロージャは、ミルンスによれば (Miles, *ibid.*, p. 157)、三つの作用をもつた。

- 一、開耕地農場の崩壊 (The break-up of open-field farms)
- 二、共有地の私有化 (The appropriation of Commons)
- 三、荒蕪地の利用 (Reclamation of waste lands)

かゝる三つの作用をもつたエンクロージャは經濟的動機から發生した。純粹經濟的立場からいへば、エンクロージャは疑もなく利益であつた。それは進歩的な農民をして、マナー制度の特質をなした土地と時の浪費を減ずることを可能ならしめ、彼等は土地を新らしい方法で使用する實驗をなすことを得て、土地をもつとも有利に使うことが出來た。そして農地から商工業や外國貿易の爲めに賣るべきより大量の生産物を獲得することが出來た。かゝる經濟的以外の社會的見地から見ると、エンクロージャは農村の社會的構造を崩壊させる作用をなした。すなわち小の holding から生計を得ていた隸農は土地を奪われ、共同牧地や荒地で働いていた放牧地使用者 (squatters) は追い出され、かれらは或いは小作人となり、或いは土地を保有せざる農業

労働者となり、或いは商業方面に身を轉ぜざるをえなくなつた。

要するにエンクロージャは土地の私有化、資本化、集積化、商工業化を促進し、それによつて古い封建社會の基礎をくつがえし、資本主義社會への道を切り開く役割を演じたのである。モフィットはこのエンクロージャの社會的意義を次のごとく要約している。「エンクロージャ運動 (enclosure movement) は工業の經濟的構造における諸變化の頂上であり、完成である。それと同時にまたそれは、新しい商業的かつ個人主義的精神が自己を十分に表現する手段である。エンクロージャはマナー制度の開放耕地の浪費的な諸方法を放棄し、管理の經濟 (economy of management) と新しい技術的發達がもつともよき十分の收穫をあげた一つの新しいシステムを置きかえたことを意味する。農業が初めて共同體にとり利潤の源泉となつた時に開放耕地の運命は盡き、そしてエンクロージャがすでに地平線上に上り來つたのであつた。エンクロージャは、マナーの領主が社會的にも經濟的にも主長であつた自給的マナー組織から、地主が利潤獲得の爲に組織された工業が首長である資本主義的組織への轉化の完成を劃したのである。」(Moffit, *ibid.* p. 55)。

古い秩序から新らしい秩序への轉化への第五の特質は生産の市場化 (marketing of produce)

である。この生産の市場化は生産の増加、家畜、穀物その他の生産物の地方専門化、農地から段遠くなつて行く諸商工業の中心地からの需要の急激な増加によつて條件づけられた。第十八世紀では農業は仲介人 (middleman) の著るしい發達によつて發達した。穀物輸出の顯著な發達は市場化の方法を變化せしめた。仲介人組織は、消費者と結びつくために仲介人に依存した小製造者と、自らの販賣組織をもつ近代資本主義的マヌファクチュアス (manufactures) との間の中間的な存在であつた。ミドルマンは商業資本家の代理人 (agent) であり、資本主義的マヌファクチュアの出現するまで、商業資本によつて小生産者を支配した商業資本家の手先であつた。封建的支配者による經濟の支配から、資本主義的資本の先驅である商業資本の制覇を漸次完成させる過渡的使命を持つたのである。

第十八世紀初頭の農村における階級の最上位には大地主 (great landlords) があつた。大地主は主としてロンドンその他の都市に住居し、一年のうちごく僅かの時日しか所有地に住せず、所有地の管理はこれを家令、執事 (stewards) にまかせ、事實上不在地主であつた。

これにつぐ農村の階級は gentry 又は squire と呼ばれる地主階級であつた。彼等は大地主とちがつて農村と常に密接な關係を保ちそこからの收入によつてのみ生活した。しかし彼等自ら耕

作せず、耕作はこれを *Parishes* に委し、自らは農村の行政および司法を支配したのであつた。古いマナー時代のマナー裁判所はマナーの崩壊と共にこの *quire* の権力によつて代られた。かれらはまた宗教的には教會委員會 (*Church vestry*) を支配し、また賃銀を決定し、ポーナス制度に干渉し、パンの大きさを決定するなど經濟方面にも権力を振つた。彼等は他方禮儀を重んじ、狩獵や射術に耽り、親切 (*hospitality*) を享樂し、代表的な郷紳であつた。

地主の第三階級はヨーマン (*yeomanry*) であつた。かれらは地主であると同時に、その所有土地を自ら耕作した。十七世紀末では全人口の七分の一がこのヨーマンであり、十八世紀の初めには農村地主の大部分はこのヨーマンリーであつた。當時においては土地は漸次政治権力を握る基礎となり、その結果ジェントリー達はその所有土地を増加させる爲にヨーマンから土地を買ひ上げはじめた。同時に商業資本を蓄積した商人たちも政治権力に近づくためにヨーマンの土地を買収したのである。また他方では議會はエンクロージャを強制しはじめこのエンクロージャのためには柵を作つたり、濠を掘つたりすることが必要であり、そのためには多大の費用を必要としたが、ヨーマンはこの負擔に堪え得ず、その所有土地を賣却し、エンクロージャによる土地清掃の犠牲となつた。さらに産業革命が近づき工場制度が家内工業制度 (*domestic industry*)

に代るに及び、ヨーマンリーはその最初の經濟的支柱を失つてしまつた。また工業地帯においてもヨーマンは當時政府によつてなされた商工業補助のための諸税、時勢の變化への洞察を缺いたこと、商工業への轉業のために資本をこしらえる必要から土地を賣却したこと、などによつて漸次没落して行つた。そうした理由によつて、産業革命の初期までに、このヨーマンの數は激減していつた。そしてこのヨーマンと稱する地主階級は、土地を有しない農業労働者、小作人、または工場における労働階級へと轉落して行つた。アーノルド・トインビーは、ヨーマンの没落について、左の如き結論的解釋をしている。「ヨーマンは經濟的原因の避け難い作用のために一部分姿を消したというよりはありうべきことである。しかしこれのみがそんな大規模になされたヨーマンの没落へ導いたのではないであらう。ヨーマンをして土地の把持を不可能ならしめたのは當時の政治的諸状態、土地の非常なる重要性であつた」(A. Toynbee, *The industrial Revolution of the eighteenth century in England*, p. 44. など、同書三四頁から四四頁にかけて)。The decay of the yeomanry の題目で詳細に論じられている)。

大地主、ジェントリーまたはスクワイヤ、ヨーマンなどの地主階級の下に、それらの所有する土地を賃借した小作人階級 (*tenant farmers*) があつた。小作人の小作地の面積は平均二十乃至

五十エーカーであり、大きくて百五十エーカーであつた。地代は一エーカーにつき二十シリング前後であつた。古い秩序から新しい秩序への轉化の一特質は前述したように耕地の擴大であるが、小作人はこの傾向に乗じて小作地を擴大し、近代資本主義的農民へと轉化するに至つた。これ *aggrandizement of the tenant farmers* と稱せられる現象である (Moith, *ibid.*, p. 108)。

この小作人の下には賃銀取得者である農業労働者があつた。その一は小屋住 (*cottagers*) であり、これは小屋とともにそれに附屬する四乃至五エーカーの土地を借り、農業労働をするとともにその耕地及び共有地利用によつて生計を立てている農民である。他の一つは、スクワッターズ (*squatters*) であり、かれらは隣人のために農業労働をするとともに部落の荒地を利用することによつて辛じて生計を立てていた階級である。cottagers と squatters とはともに農業労働者であると共に *farm servants* として主人の土地の上に住居し、それに依存する階級である。

以上が産業革命前における農村の社會階級であつた。

次に産業革命前夜における工業について述べる。産業革命前においてイギリスにとり、もつとも重要な産業は羊毛工業であつた。然しこの部門においてすら長い期間その生産にはなんらの改

良も加えられず、ごく原始的な機械が用いられたにすぎなかつた。羊毛商 (*stapler*) の手によつて集められた羊毛の、選擇 (*sorting*)、梳毛 (*combing*)、紡績 (*spinning*)、製織 (*weaving*) などの各生産過程はすべて手を働かす機械をもつてなされ、一七三〇年のワイアット (*Wyatt*) の *rollerspinning*、一七三八年のケイ (*Kay* or *Bury*) の *fly-shuttle* の發明にいたるまでかかる素朴な生産がなされ、たかだか水が動力として使用されたに過ぎなかつた。要するに産業革命まで工場の数も少く、工業資本の蓄積もすくなかつた。工業は多少とも土地と農業とに結びついていた。生産の主たる形態は家内工業制度 (*domestic system*) であつた。このドメスチック・システムの特質は、第一に工業の單位が家庭 (*household*) であることであり、第二にその家庭の主人は、彼自身の家庭内においてその家族および徒弟、職人たちとともに働き、監督することであり、第三に従つてその主人は生産組織の中心點であり、原料の供給、固定および流動資本、仕事の管理及び労働などの統制、そして生産物の販賣などの生産の主要事はすべて主人の手によつてなされたことである。ドメスチック・システムは、それ自身生産手段をもつ獨立した單位を形づくつていた。このシステムはかゝる組織を持つ事からしてビヤード (*Beard*, p. 14) は家内工場 (*domestic factory*) とする名稱を與えている。

しかしかゝる自立的なドメスチック・システムは中世紀末の商業資本の擡頭、十七世紀の四十年代及び六十年代における初期の民主主義革命による商業資本の強大化によつて、商業資本家に利用され、商業資本支配の犠牲とならざるを得なかつたのである。

最初ドメスチック・システムのもとで主人は原料の生産者から直接に原料を買い、生産物は主人が直接に消費者に賣るか、市場に持つて行つたのである。これがドメスチック・システムの原型である。しかしかゝるドメスチック・システムの原型は、市場の擴大、需要の向上に伴う生産の質の變化によつて、漸次崩れ行く運命に當面せざるを得なくなつた。

かゝる變化の先頭を勤めたのは、商業資本の代表者又はその手先としての仲介者 (middleman) の出現であつた。今イギリス最初の重要な工業であつた羊毛業について見ると、まず各地の羊毛を選択しなければならなかつた。又羊毛を生産する農民はその年に剪りつた羊毛を一日も早く賣りたがたが故に市場に止まる事が短期間であつた。然もドメスチック・システムの下における羊毛工業者は一年分の羊毛を買いとるだけの十分な資本を持つていなかつた。ここにおいて、羊毛を大量に買占め、その内羊毛工業者の欲する羊毛を選択し、それを彼等に必要なだけ融通する仲介者が必要となつた。これがステープラー (stapler) と稱する羊毛仲介商人の出現である。

かゝる事情は、木綿工業においてもつと切實であつた。なぜなら、木綿工業の原料たる棉花は、レヴァント地方、西インド植民地および南アメリカ、北アメリカから大量に輸入されるのであり、従つてこの輸入に従事するのは大商業資本家であり、これらの大商業資本家は原料を通じてドメスチック・システムの下における獨立的小生産者を支配するに至つたのである。マンチェスターのティピングス家 (Tippings)、モスレイス家 (Mosleys)、チェタムス家 (Chethams) のときは、直接に獨立生産者を雇傭してはいなかつたにしても、かれらに金融し、その金融を通じて彼等を支配したところの大商業資本家であつた。これらの商業資本家はその輸入した棉花を獨立小生産者に供給するに當つて、その原料を賣るほかに、原料を供給してそれを紡がせ、織らせ、そしてその生産物をもつて支拂させたのである。これが "putting-out" (投資または費すの意) と稱する前貸制度であり、ドイツの verlegen (Verleger) に當るものである。そして遠隔の地の小生産者に対しては、"middleman" たる "putters-out" をコミッション制度で雇傭することによつて、それを通じて支配の手を擴大したのであつた。かゝる "putting-out" の制度は木綿業のみならず、當時ランカシア (Lancashire) の時計製造業においても行われた。かゝる大商業資本家のほかに、更に地方には當時 fustian master (綾織元) と呼ばれた、中小商業

資本家が居り、それがこの前貸制度によつて小生産を支配していた。そのいずれにせよ、この“putting-out”制度においては、商業資本は單に流通部面だけに活動するに非ずして、前貸制度を通じて生産面をも支配するに至つたことは注目されなければならない。羊毛工業における *stapler*、木綿工業における“putters-out”は、産業革命直前におけるイギリス商業資本の制覇過程において大きな役割を演じたのである。

この傾向と同時に、またドメスチック・システム内部における支配關係が発生した。繊維工業において、製織業がもつとも最後の完成過程であり、したがつてこの製織業がその生産における重要性から、その過程生産部門たる梳毛、紡績、捺染等の獨立生産者を支配するに至つた。したがつてそれらの支配者たる製織業者が商業資本の支配下にありとするならば、商業資本は、從來獨立していた繊維工業における全過程をその資本のもとに統率することとなり、またその製織業者が商業資本の支配をうけていないならば、ここに小規模ながら工業資本 (*industrial capital*) 擡頭の傾向が発生しつたことと見らるべきであらう。

かくてそこにショップ制度 (*shops*) が生じた。モフィットは、*「第十八世紀の中頃に、主人たちはその仕事を増加して多くの織機を使用するに至つた。かゝる一人の雇主のもとにおける*

労働者 (*workmen*) の集中は、すでにショップと名づけられ始めた。ある場合にはショップは數臺の織機をもつことの出來た織物業者の擴大された職場であつたであらう。そのうちのあるものは一人の雇主のために労働する人たちの群であつた。これらのいろいろの理由、すなわち、原料供給における商人的仲介 (*merchant-middleman*) 人の介入、他の労働者による労働者たちの雇傭、被雇者たちのために商人や主人たちが複雑な織機を設置する習慣が増大して個々の主人の仕事の範圍が擴大したこと、などは、經濟的諸關係をいちじるしく今日の關係のごとくしたのである」 (*Moffit, ibid. p. 200*)。

またトインビーは (*A. Toynbee*) ランカシャの木綿工業について次のように書いてゐる。「ランカシアではだんだん資本家雇主が發達して來た。まずヨークシアと同じく、織物業者は初めて經糸や横糸を自らの手で供給し、かれ自身の家で加工し、みずからその生産物を市場に持つて行つた。しかし紡績業者から糸 (*Yarn*) を獲得することがだんだん困難となつて來た。そこでマンチェスターの商人達はかれに原料たる棉花や經糸を與えるようになつて、織物業者は全く商人たちに依存するに至つた。ついに商人達は一つの都市に三十乃至四十の織機 (*looms*) を集めるに至つた。これこそ大なる機械發明において資本主義制度にもつとも近よつたものであつた。」 (*Toyn*

See *ibid.* p. 30—31)。

ダニエルズ (Daniels) も「かゝる事實は、ドメスティック・システムは資本主義的雇主のシステムであり、その典型的な労働者と雇主との關係はそれのもつとも基礎的な點では工場制度出現後の労働者と資本家のそれと同様であつた」としてゐる (Daniels, *Early English Cotton Industry*, p. 30—Motif, p. 201. より引用)。

モフィットも當時における製造工業は一般的には domestic basis の上で行われたが、大きな被服工業 (clothiers) や生糸工業においては工場制度がすでに始まつていることを指摘している。クローノーはその著一般經濟史第四卷において、本来のマヌファクチュア的な大經營があつたのはただ繊維工業特に毛織物及び毛氈の部門だけであつた。商人的な問屋や輸出業者を使用し、主として輸出向けの仕事をしている經營も、概してかなり小さな仕事場をもち、そのなかではただごく少數の日傭職工が働いていた。……工場手工業的製造業は一七三〇年にケイが梭を、一七八三年にレウイス・パウエル及びワットが織機を、それから一七六四年にジェームス・ハーグリーブスがジェニー紡績機を發明した後になつて始めて木綿工業において重要性を獲得するようになった、と述べてゐる (Cunow, *Allgemeine Wirtschaftsgeschichte*, Bd. II)。

繊維業以外の各種の工業では、すでにその仕事の性質によつて、多くの労働者を一所に集中せしめるマヌファクチュア制度が發達していた。たとえば炭礦のごときは、その仕事の性質上産業革命前機械化が行われる以前においても多くの労働者を一所に集めなければ仕事をなしえなかつた。炭礦の租借料や賃銀の支拂、諸設備の設置などは資本を必要とするから、資本家が中心となり、働くものは労働力以外に何もものを有せずただ賃銀によつてのみ生活していた。したがつて炭礦業は、産業革命以前に、すでに資本家的組織に近よつてゐた。その他同様の性質を有する生産部門である鉛、錫鑛業においても同様であつた。それらの發達につれて小い家内工業的鑛業は漸次没落しつつあつた。

ロンドンに近いサラサ (更紗) の捺染業 (calico-printing) によつても、その総合的な生産過程の性質から、また水力を動力としたという點からして、家内工業的經營は漸次マヌファクチュアに移りつつあつた。一七二〇年ごろ大きなサラサ捺染業者は一つの作業場に一五二人の労働者を雇つてゐた。その他製鐵業、製銅業、仕事それ自身多くの労働者を一所に集中させることを要した工業には家内工業は漸次姿を消して行つた。その他水車設備などによつて動力を水に仰いでいた工業、たとえば製粉業、漂白業、生糸工業なども動力の點よりしてマヌファクチュア形態を

採つていた。

以上は主としてモフィットの『産業革命前夜におけるイギリス』を基礎として産業革命直前の農業、工業、等について述べたのであるが、イギリスにおいてマヌファクチュア制度すなわち手工業における工場制度が一般的に行われたりや否やについては従来學者間に論争のある所である。アッシュレーは前掲『イギリスの經濟組織』において、マルクスによつて主張されたマヌファクチュア制度は、すなわち、「職人が資本家の統制下に集合することが、一般的・特徴的でないかつかつたことは確かである」(Ashley, *ibid.* p. 149)と書してゐる。しかしこれは、一方ではアダム・スミスがその『國富論』(Wealth of Nations)において引用してゐる留針工場の存在や、十六世紀においてニューベリー(Newbury)のジョン・ウィンチコム(John Winchcombe)工場が百個の織機を備えていたことや、僧院の開放後メルメズベリー(Melmesbury)修道院やオスネズ(Osney)修道院が多くの織機を有する作業場となつたことや、また一五五五年に織元が多くの織機を備え多数の日給職人や不熟練者を使用することを禁止した織匠法 Weavers' Act が公布され、それが十八世紀にまで残り十九世紀の初頭においてもこの法令の廢止に反對の聲が高かつ

た史實を認め、また「スチュアート王朝の時代を通じて各種製造業に亘り常に大事業が成立したことは確實であり、硝子、石鹼および針金製造業はこれに屬する」(Ashley, *ibid.* p. 149)と書きまた十八世紀の終り以前において水車を動力とする絹糸紡績工業において可成りの規模の織維工場が成功したことを擧げている。ただ彼はマヌファクチュアは多く成功せず産業革命直前には一般的でなかつたことを強調している。

しかし前述したように、イギリスにおいて産業革命前に被服工業、生糸工業、更紗工業、炭礦業、製粉業、漂白業において、一作業場に多くの職人が集合し、作業しつゝあつたことを述べた。またモフィットは一人の雇傭主のもとにおける多数の労働者の集中であるショップ制度の存在を指摘している。ピアードは一七六〇年までに既に少数ではあるが非常に多数の労働者を使用している製作所の存在したことを指摘してゐる(Bead, *ibid.* p. 183)。またヘイス(Hays)も次の職人(workmen)は部分的に資本家に依存するに至つた。富める製靴師は自ら働く事をやめ、多くの職人(journeymen)を雇ひ、その職人は事實上日傭労働者(day-labourers)となつた。羊毛工業では富有な商人が勃興しつゝあり、かれは織工に紡いだ糸の多くを興えて布を織らせた。

工場制度の始めはすで見られた。すなわち、商人製造家 (Merchant manufacturer) は半ダース程の織機を小屋 (shed) や屋根裏 (attic) に集めその中に賃銀で働く織工を雇用したのである。かくのごとく労働と資本との分離、労働者と雇主の分離は、すでに機械發明以前に始まつたのであるが、本當の革命は動力を用いる機械 (power-machinery) の採用と工場 (factories) が茸のように起る前は來なかつた。」(Hays, A Political and Social History of Modern Europe, p. 77-8) かゝるマヌファクチュアやショップ的形態をとらない小經營も、商業資本によつて完全に支配せられて、それはもはや家内工業の本質、すなわち小生産業者の獨立性を喪失していた。

レーニンは「ロシアにおける資本主義の發達」(岩波文庫版下巻、第六章、資本主義的工場手工業と資本主義的家内労働、第六節、工場手工業における商業資本と産業資本、買占業者と製造場主) において、次のごとくいっている。「工場手工業と小經營の繼續的併存は一つの全く自然的な現象である。生産が手工業的である結果、大經營は小經營に對してなんら決定的な優越を持たない。もつとも簡單な諸部分作業を作りあげる分業は、小さな小仕事場の出現を容易ならしめる。それゆえ、多數の小經營と併存せる少數の比較的大なる經營こそ、資本主義的マヌファクチュアに取つて典型的である」。マルクスもまた、マヌファクチュアが當時において一般的でなかつたことを認めている。

例えば、資本論第一卷第十二章の末尾において「マヌファクチュアは、社會的生産をその全範圍においてとらえることが出來なかつたし、またそれをその深部において變革することも出來なかつた。マヌファクチュアは、都市手工業と農村家内工業との廣い基礎の上に經濟的作物 (Kunstwerke) として聳えていたのだ」といっている。

だからマヌファクチュアが一般的でなくても、少數ながら比較的大きなマヌファクチュアが行われ、しかもドメスチック・システムが商業資本の支配によつてその本質を失つてゐる以上、イギリスにおいてマヌファクチュア制度が行われたことは否定すべくもない。その點で、アッシュレーやセー (See) のマヌファクチュアに関するマルクス批判はまさしく的を失つてゐる。かくてイギリスにおいても機械出現以前にすでにマヌファクチュア制は行われていた。

イギリスは産業革命前においてはなお多分に舊制度を殘存しつつあつたにもかかわらずしかも農業、工業兩部門においては舊制度から新制度への轉換がなされつつあつた。それにつれてイギリス商業資本の力は増大しつつあつた。

アーヴィングによれば (G. W. Irving, An Introduction to Economic History, p. 162—第十二章、The Expansion of Britain)、一七〇七年には、イギリスとスコットランドの議會とが統合した。この兩

者は、従来同一の王(King)の下に立ちながら、その行政、立法はそれぞれ獨立し、兩者間の經濟的交通の自由は禁止されていた。兩者の間には、ことにイギリス商人の嫉視によつて、つねに衝突、虐殺が繰り返されて、戦争の危機を絶えず胎んでいた。しかし一七〇七年における兩議會の統合によつてこの歴史的な摩擦は解消し、その時以來「イギリスの政治的、經濟的歴史はグレート・ブリテンの歴史のなかに融け込んでしまつた」のである。これによつてイギリスの商業は擴大し、強化し、商業資本の力はいよいよ強力なものとなつた。

つぎにイギリス植民地の擴延の問題がある。當時、イギリスの植民地は、第一に、王領植民地(crown colony)があつた。これは主として掠奪、又は讓渡によつて、他國から獲得した植民地であり、王が理論上絶對的の支配者であつたが、實權は王によつて任命された官吏(officials)の手に握られていた。インドをはじめ、フィジー(Fiji)、ジャマイカ(Jamaica)、イギリス領ギアナ(British Guiana)、シラ・レオーネ(Sierra Leone)等が、この王領植民地であつた。

王領植民地のほかに自治植民地(settle colony, self-governing colony)があつた。イギリス人が移住し、イギリスの法律が行われ、自治的政府が設けられ、その政府が獨立の課稅權、立法權をもつていた。この自治植民地のうちで大きいものとしては、オーストラリア、カナダ、ニュー・

ジーランド、南アフリカなどが數えられる。これらの自治植民地はみずからの議會を有し、完全な自由と管理權とを持つていた。當時において、これらの植民地の存在、その性質に通曉していたのは、これらの植民地を貿易の對象または根據地とみなし、商業的な利害關係と關心とを持つていた商人だけにかぎられ、イギリスの一般人、労働者などは植民地についてなんらの知識も有してはなかつた。イギリスは、イギリス商業資本家の壓力によつて、マーカンティリズム政策を採り、この政策を背景にして植民地貿易に躍つたのが、いわゆる mercantile class といわれた商人であつた。このイギリスのマーカンティリズム政策の目的としたところは、唯一にイギリスだけの經濟的利益であり、輸出超過によつて金銀をイギリスに集中しようとするのであつた。イギリスの植民地は、イギリスに低廉な原料を供給し、イギリス商品の販賣地となり、したがつて、植民地がイギリス商品と同種商品の生産競争者となつたり、植民地がイギリスの競争國に、たとえばフランスに、原料を供給することを許容しなかつた。だから、砂糖、煙草、羊毛、棉花、麻、銅、鐵、皮革などの原料資材は、イギリス以外の國に輸出することを植民地に嚴禁した。一六九九年の羊毛、毛糸、毛織物の輸出禁止令、一七五〇年の植民地における製鐵業の禁止は、みなこのイギリスのマーカンティリズム的植民政政策であつた。

一七五六年から一七六三年においてアメリカ及びインドを舞臺として行われた英佛間の七年戦役はイギリスの勝利となり、従来のフランス植民地はイギリスの勢力下に掌握せられることとなり、それによつてイギリスの植民地は擴大し、イギリスの對植民地交易、それによるイギリス商業資本の力は著るしく増大し、商業資本家階級の力を強盛ならしめた。インドはイギリス製品の老大な市場となり、また棉花、羊毛などの供給源となり、その結果、マンチエスター、ランカンシアにおける木綿、羊毛工業は異常な發達を示した。アデン、ジブラルタルは、軍事的要衝であるばかりでなく、あらゆる種類の粗原料の供給地であり、ジャマイカ (Jamaica) は砂糖、コーヒー、棉花、果實、煙草、ラム、バハマ (Bahama) とヘルムダス (Bermudas) は果實、ニゲリア (Nigeria)・ゴールド・コースト (Gold Coast)・ガンプア (Gambia)・シエラ・レオン (Sierra Leone) は椰子油、ゴム、象牙、金等の産地であり、セイロン (Ceylon) は紅茶と米、ビルマ (Burma) はチーク、錫、棉花、米を産した。これらのクラウン・コロニー (crown colony) のほかにオーストラリア (羊毛金屬、小麥、肉類)、ニュー・ジブランド、(たうもろこし、亞麻、オリーツ、木材、果實、羊毛、冷凍肉)、カナダ (小麥、木材、パルプ、諸金屬、魚類等)、ニュー・ファンドランド (Newfoundland) (木材、パルプ、魚類)、南アフリカ (ダイヤモンド、金、

砂糖、棉花、コーヒー、紅茶、煙草、羊毛、駝鳥の毛、家畜、ゴム) などの豊富な資源を有する自治植民地を確實に支配したのであつた。

かかる外國貿易、内國商業の發展につれて、イギリス商業資本の力は増大し、それが遂に手工業を支配し、家内工業制度からマスマファクテア制度へと發展せしめたのである。マルクスは資本論第三卷において古代の商業資本と近代商業資本の差異を次の如く結論している。「古代世界においては商業の作用と商業資本の發達とは奴隷經濟に結果するのを常としている。またある場合には直接的生活資料の生産を目的とするところの家父長的奴隷制度をば餘剩價値の生産を目的とする所の家父長的奴隷制度に轉化せしめるに過ぎない場合もあつた。しかるに近代社會においては、それが(商業の作用及び商業資本)資本主義制度の生産方法に結果して行くのである」。かくて近代商業資本は、資本主義への轉化において重要な役割を演ずるのである。商業資本は、その本質においては、ただ流通過程においてのみ自己を増殖するのであるが、マスマファクテア期においては、商業資本は生産過程を支配しそこから利潤を獲得するのである。商業資本はこの時期において絶頂期に達する。しかしこの時期においても商業資本の自己増殖は、主體は流通部門であることにおいて、主體を生産過程におき流通部門を従として支配するところの産業資本

と異なるのであり、産業資本は、産業革命による工場制度の出現によつてはじめて商業資本を征服するにいたるのである。

ここに注意すべきは、イギリス商業資本の擴大において、人間を商品とする商業、すなわち奴隷交易が大きな役割をもつたことである。當時アメリカ、殊に南部では土地經營の爲めの勞働力が不足していた。これを補足したのは最初は、イギリス、アイルランド、ドイツ人であつて、アメリカに渡航したくても渡航する金を持つていないものに費用を給してアメリカに連れて來た契約奴隷(indentured slave, servant)であつた。しかしそれでも不十分であつたので更にアフリカから黒人奴隷(negro)を連れて來た。そして最初その奴隷交易に従事したのはイギリスの *Loyal African Co.* であつたが、非難を蒙つたために一六九八年には同會社による奴隷獨占賣買にやんだが、それに代つてイギリスの商業ブルジョアがその権利を取得した。クローノーは、「黒人賣買は好個の利益多き企業となつた。それはアメリカの煙草農場の所有者が多く、黒人商品を消費し、高い價格を拂つたからである。一七〇〇年から一七五〇年に至る間、年々平均一萬五千—二萬五千人の奴隷がアメリカ植民地に輸入され、十八世紀の後半二、三年には、その輸入は四—五萬人に達した。」と云つてゐる。

ピアードは次のごとくいつてゐる。「十八世紀に至るまで土地所有者階級がイギリスの政治的及び社會的生活の支配分子であつた。しかしそれ以來かれらの力は衰えはじめた。土地所有貴族とならんで有力な商人階級が擡頭し、富を蓄積して勢力を獲得し遂には社會的地位を獲得した。その富を外國貿易から獲得した商業資本家のあとに、國內における製造工業から大きな富を築き上げた資本家が現れた。この資本家たちは大發明の出現以來、數においても富においても急激に増加して漸次他の勞働者の主人として勃興して來たのである。」(Beard, *ibid.*, p. 13)。

かゝる十七世紀末から十八世紀の中葉にかけての經濟的・社會的變化がここに新しい生産方法としての機械による生産を必然たらしめたのである。Irving は *An Introduction to Economic History* (p. 180) において、次の三つを産業革命の原因として擧げてゐる。第一は、人間の行動の背後におけるその推進力としての獨立思想の發達である。すなわち、舊習慣を追ふことではなくして古い諸方法に満足せず、新しい方法を求むることである。十八世紀以前において人間はただ自然法則に追隨するだけであつた。人類の大多數は模倣者であり、創造的才能を持つていなかった。産業革命は少數の人達の仕事であつた。アイザック・ニュートン(Isaac Newton)、ロバート・ボイル(化學者 Robert Boyle)、ジメフ・ブリーストリー(酸素の發見者 Joseph

Priestly)等は數學や物理学や化學を考へはじめ、しかもかれらはかれらの仕事の商業的價值などを考へず、ただ知識を求めることであつた。そこから實用に使用される科學者の諸發見が生れたのである。第二の原因は、第十七、十八世紀では國家が經濟生活への統制力を失いつつあつたことである。ギルドの制限は今や完全に崩壊した。チュードル朝の諸法令は理論としては存在したが、そのうちに新しい精神が勃興しそのためにやがて古い法令はその力を失つた。國家が産業に干渉する限り、進歩は不可能であり、諸實驗を實行に移すには自由なる状態を必要としたのである。第三の原因は、政治的發達である。イギリスは一六八八年に神權による王權(kingship)は亡びた。それに代つて議會によりコントロールされる王政が始まつた。かくして專制主義は民主主義の前に屈服した。

しかしこのアーヴィングのあげた三つの原因は、それ自身中世封建制度からの經濟的、社會的解放の結果である。産業革命を必然ならしめたのは、いまままで述べ來つた中世封建制度内に發達し來つた經濟的・社會的變化でなければならぬ。

マルクスは「ドイッチェ・イデオロギー」において次のように書いている。「十七世紀において不斷に發展した一國家、すなわちイギリスへの商業ならびにマヌファクチュアの集中は、この

國のために一つのそれに相應する世界市場を作り出し、そしてそれによつてこの國のマヌファクチュアの生産物にたいして從來の産業上の生産方法によつては、最早充されえないような需要をつくり出した。生産力の手に負えない程大きくなつたこの需要は、諸自然力の産業の目的への應用、機械および最も擴大された分業による大産業を生み出したことによつて、中世以降における私有財産制の第三期を招來したところの推進力であつた。この新しい状態のその他の條件、すなわち國民の内部における競争の自由、ニュートンによつて完成された理論力學の發達等は、イギリスにすでに存在していた」。

イギリスの産業革命はつぎのような經過をとつて現れた。まず最初に纖維業、そのうちの木綿工業の生産過程に機械の發明がなされた。いまこのイギリスの機械發明の歴史をヘイズの『近代ヨーロッパ政治社會史』(C. Hayes, A Political and Social History of Modern Europe Vol. II p. 69—)によつて簡単に述べる。それまでの木綿工業の生産過程はすこぶる簡單な、しかも勞多き、緩慢な方法をもつてなされてきた。まず棉花から種を取りのぞくのは手をもつてなされ、纏つた棉花の纖維は針金のブラッシをもつて梳られる(carding)。梳られた纖維はわれわれの祖母が用いたような紡車によつて糸に紡がれるのであるが、それが多くの時間を必要とした。かくして紡か

れた糸は loom と呼ばれる木製の織機によつて織られたのであるが、この織機では平行した多くの緯糸 (warp) が張られ、その間を横糸を導く木製の針ともいふべき梭、または杼が往復することによつて布がつくられたのである。一七三八年ケイ (John Kay) は飛梭 (flying shuttle) を發明することによつて、任意の幅の布が以前の生産の二倍の速度をもつて、しかも勞力すくなく生産しうるに至つた。この生産能力の倍化した織機の發明によつて、糸に對する需要が激増したがこれに應ずる紡機がしばらく發明されなかつたので、懸賞によつて募集された。三十年を経て一七七〇年にランカシャイヤにおける一織工、ジェームス・ハーグリーブス (James Hargreaves) は珍妮 (Jenny) とする新紡績機の特許權を獲得した。これは八つの紡錘 (spinning wheels) が結合され一つの把手 (crank) で容易に稼働しうる仕掛けであり、従つて女、子供の手でも一人で同時に八つの紡錘を動しうることとなつた。この新機械は廉價に作られしかも使用が容易なもので、一七八八年にはイギリスで二萬臺が用いられ、その後改良されて最大のもは八〇、最小のものでも六乃至七個の紡錘が取付けられるに至つた。かくのごとく機械の生産が増加して來ると従來の手織職工たちは機械に反感を抱き、ハーグリーブス家を襲撃して機械破壊を行つてゐる。これにつづくものに一七六九年のリチャード・アークライト (Richard Arkwright) のウォ

ター・フレイム (water-frame) 紡績機の發明があつた。このウォター・フレイムは四對のローラーからなりそのローラーは水車につながつたベルトによつて廻轉される装置であつた。この紡績機は一七三〇年にワイアット (Wyatt) によつて發明された卷軸紡績機 (roller spinning) を層改良したものである。アークライトはかゝる生産力の増加した生産手段を發明したのみならず、梳綿機その他多くの新發明をなし、自ら一つの大きな工場を建てた。この工場はまだ水力を動力とした點において、近代的工場ではなくして、spinning-mill に過ぎないが、普通にかれは "Father of the Factory" と呼ばれ、當時の王ジョージ三世はかれにサー (Sir) の名稱を與えて貴族に列せしめてゐる。一七七九年にサミュエル・クロムトン (Samuel Crompton) はミュール (Mule) 紡績機を發明した。Mule (驢馬、雜種) と呼ばれた理由は、その機械が、紡ぐ速力の早いアークライトのウォター・フレイム機と、精巧な撚り糸をつくるハーグリーブスの珍妮機とを巧みに組み合せて、更に改良したものである。このミュール機の出現によつて、紡績の速度は急激に早まり、しかも精巧にして強靱な糸をつくりうるようになり、紡績の生産力は著増した。一八一二年にはすでに、五百萬の紡錘を有するミュール機を使用する數百の工場が設立された。

一七八五年には牧師のカートライト (Edmund Cartwright) が力織機 (power loom) を發明した。この機械では、梭はスプリング仕掛で動き、しかも糸が切れる毎に自動的に停止する特徴をもち、あらゆる種類の布を織ることができた。動力はまだ水力であつたが、一七八九年に蒸氣機關を使用するようになった。

一七八三年に、ベル (Bell) は捺染機を發明し、漂白劑、染料などもつづいて發明され、一七九二年にはホイットニー (Eli Whitney) によつて、棉花から種子をとる綿繰機 (cotton gin) が新に現われた。第十九世紀に入るとともに、紡績機の發明や改良は一層高度化するにいたつた。かくのごとく機械が相次いで發明されるとともに、こんどは従來動力として使用された人間の手、馬、水等は不完全、不便、非力となり、それらに代る強力な、可動的な、自然に支配されない、新らしい動力の出現を必然ならしめた。この必然が蒸氣機關を登場せしめたのである。熱によつて氣體の膨脹力を利用する人間の意圖は、遠くアレキサンドリア時代に遡りうる。紀元前一〇〇〇年頃アレキサンドリアの幾何學、力學者たるヘロン (Heron) は、すでに蒸氣壓を利用する装置を知つてゐた。十六世紀のカルダノ (Cardano)、十七世紀のポルタ (Porta)、ソロモン・ド・ノー (Solomon de Caus) 等の諸學者も蒸氣についての研究をなし、それにもとづく簡單な

装置を作つた。一六九〇年にはフランス人パパン (Denys Papin) が、一六九〇年にはサヴァリ (James Savery) が素朴ではあるが蒸氣機關を作製してゐる。更に進歩した蒸氣機關は一七〇五年に、トーマス・ニューコメン (Thomas Newcomen) によつて發明され、その一層改良されたものは五十馬力をもち、しかも従來の六分の一の費用でそれだけの動力を生産しえた。しかしこれより更に進歩し實用に値したものは一七八六年にジェームス・ワット (James Watt) によつて發明された蒸氣機關である。これはニューコメンのもの四分の一の石炭の消費で十分であつた。しかしニューコメンの機關は鑛山における水揚ポンプに使用されただけであり、ワットのそれも最初はポンプに使用されたが、ワットは更にピストンの前進・後進を利用して機械の車を運轉する装置を考案し、これをカートライトの力織機、アークライト紡績機にとりつけてそれを動かすことに成功した。ワットの功績は、蒸氣機關の能率を一層あげたこと、およびそれを機械に應用したことである。しかし當時においてこの蒸氣エンジンを作ることは非常に高價に上つた。そこでワットは富豪のマシュー・ボルトン (Matthew Boulton) の資本によつて製造した。そしてその蒸氣汽關は各部門の機械の運轉に利用され、一八〇二年には、蒸氣機關はイギリスでは水車と同じように一般に使用せられたといわれるほどに普及したのである。

機關の相次ぐ發明、蒸氣機關の實用化は、ここに鐵に對する需要を高め、製鐵業の變革を必要とするに至つた。一七六〇年代にはスミートン (Smeaton) の送風式製鐵爐 (blastfurnace) — 水力、馬力で送風したのを、送風シリンダーにて行う) の發明、コルト (Cort) の鐵の展延工程における新發明、ハンツマン (Huntsman) の鑄鐵法の發明があつたが、一七八三年ワットは重さ七百五十磅で一分間に三百度轉打しうる汽槌 (steam-hammer) を發明し、それを蒸氣機關をもつて動かすに至り、製鐵業は漸次發達し、ついに十九世紀におけるネイルソン (Nelson) の熱風法 (hot blast) ・一八五五年のベッセマー法 (Bessemer) ・一八六四年のシーメンスとマーチン (Siemens and Martin) の open hearth 法 ・一八七五年のトーマスとギルクリスト (Thomas and Gilchrist) の基性法 (basic process) となつてここに鐵の時代 (iron age) が展開された。

年	生産能力 (單位噸)
1740	59
1738	77
1796	104
1820	284
1827	28
1839	378
	1,348,000

であり、ワットの蒸氣機關及び汽槌の發明はこの鐵の時代の黎明をなしたのである。クノーは一般經濟史においてイギリスの製鐵能力に關する前頁のような表をかかっている。

更にクノーはそれに附加して、熔鑛爐の數よりも熔鑛爐の能力の方が遙かに多く増大している事を指摘している。すなわち一七四〇年には平均して僅かに二百九十四噸の銑鐵を供給しただけであるが、百年後の一八三九年には三千五百六十六噸を供給しているからである。これはその間における機械の發達を物語るものである。當時この鐵の生産量の大部分は最初は國內に止つていた。そして多くの鐵製品や鋼鐵製品に加工されたのである。かくてイギリスは全世界の機械供給者となり、すでに一八五〇年において機械だけで百四萬磅、一八七〇年には五百二十九萬噸を輸出した。このことは、すでにこの時代からイギリスは世界の工場 (workshop of the world) となつたことを示すものであり、それによつて他の諸國の産業革命を促進し、その資本主義化を推進せしめたのである。

機械及び蒸氣機關の發明は更に運輸機關の發達を促した。ワットの機關を應用したロバート・フルトン (Robert Fulton) の汽船クレルモンツ號 (Clermont) がニューヨークからアルバン (Albany) までハドソン河を百五十哩を三十二時間で航行したのは一八〇七年であり、當時の人

達はこれを「風や潮に挑みつつ、炎や煙を吐きつつ、水上を動き廻る怪物」(a monster upon the waters, defying wind and tide, and breathing flame and smoke)と形容した。最初に大洋を航行したのは一八三八年ブリストルからニュー・ヨークまでを十五日で大西洋を横断したグレート・ウェスタン號(Great Western)であり、これは大洋の獵犬(Ocean greyhound)と云われた。さらに蒸氣機關は陸上交通にも利用せられて汽車となつた。一八〇八年リチャード・トレヴィシック(Richard Trevethick)はロンドンにおいてレールを敷設し、その上に一時間十二哩走れる最初の機關車、「捕えるなら捕えて見よ」號(Catch-me-who-can)を走らせた。一八二五年ジョージ・ステイブソン(George Stephenson)は一時間十二哩で九十噸を牽引する機關車を作り、ストックトンとダーリングトン(Stockton, Darlington)間に最初の汽車が開通し、數年後にはリヴァプール、マンチェスター間に鐵道が敷設された。

一八一四年にはロンドン・タイムズ社が最初に新聞印刷に“steam-engine”を使用した。當時ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)は彼の手動印刷機で一日二千枚の印刷をしたが、ロンドン・タイムズ社は同じ量を僅かに二時間足らずで印刷したと傳えられる(Hays, *ibid.* p. 74)。かゝる印刷機械が蒸氣機關を以つて動かされ、迅速にしかも廉價に新聞、圖書、パンフ

レットを印刷しえたことは、英國一般の教養、ことに労働者階級の政治的關心を昂め、デモクラシーの發達に貢献するところが大であつた。汽船、汽車、蒸氣印刷はワットの蒸氣機關の三嬌子であつた。かくて第十九世紀は蒸氣機關の時代となつたが、十九世紀の半ばには新しい動力として電力が、つづいて内燃機關が發明されるに至つた。

以上主としてヘイスの近代ヨーロッパ政治社會史によつてイギリスにおける機械發明の歴史を略述したのであるが、これについて次の三點が注意されなければならない。

第一に、これら産革時代の諸發明は決して發明家個人の發明ではないということである。まずそれらの發明は、過去の、古代ギリシャ時代からの、ことにルネッサンス時代からの多くの學者、多くの *artisan* 等の科學的な、技術的な功績の基礎の上に初めて可能であつたことである。すなわち科學方面における過去の人間の理論と實踐とが綜合的に統一せられたのである。これは蒸氣機關一つをとつても、ワットの發明までには、古代アレキサンドリアのヘロンから中世のカルダノ(Cardano)・ポルタ(Porta)・ソロモン・カウス(Solomon de Caus)・ウスター(Worcester)・サバリー(Savery)・バピン(Rapin)・ニューカム(Newcomen)・ロビンソン(Robinson)・ボルトン(Boulton)その他有名、無名の多くの人達の科學的研究と實驗とがなされている。ワッ

トは、ただこれら多くの人達の努力の結果を一層能率的にしたにすぎないのである。そしてまたワットのあとには、かれの業績を更に改良し、發展させた多くの學者、實踐家のあつたことも忘れてはいけない。また、すべての科學は聯關性をもつが故に、直接關係ないと思わしるものも實質においては大きい關係を持つのである。だから一つの發明には、古代からの數學、力學、物理學、化學、工學、機械學などの人間の貴重なる科學の遺産の集積が大きな背景をなしているのである。機械發明史の著者、アッシャー (Usher) は正しく言う (第一章、第二節) 「イギリスの經驗論者は發明家のうちに英雄を見出さんとした傾向があり、精神主義者のカーライル (Thomas Carlyle) (一七九五—一八八一年) は發明家について讚美の言を述べてゐる。……しかしカーライルには唯一つ間違つたことがあつた。すなわちかれは、歴史の進展は少數の比類なき天才指導者の活動に歸するものとした。かれは歴史過程には、これを全體として見るときは、ただに決定的に重要な地位を占むる少數者が必要であるばかりでなく、必要かくべからざる業績を遂行したもにかかわらずそれが直接重要でもなければ特に目立ちもしない爲めに無名で世間には少しも認められない多數の革新を行つた人々も必要であつた事を理解することが出来なかつたことである。一體ある一つの業績が完全に成就されるということは、實はいろいろ度合の異つた、普通の

能力をもつた極めて多數の人達の努力の累積の結果である事が理解されて始めて歴史過程は理解し易くなる。……歴史をいわゆる天才人において、ごく稀れに、氣まぐれに出現する神祕的、超越的力の問題的顯現という立場から取扱う事は必要ではない。革新過程は連続的のものである」。(富成喜馬平譯本、第七頁)。發明家出現はかくのごとく過去の人達の業績の統一完成を必要とする經濟的・社會的基礎が必要である。いかに科學が進み、技術が発達しても、それを必要とする經濟的・社會的條件が成熟しなければ發明は具體化されない。スペンサーはいう「もしワットが鐵のことをすこしも知らぬ種族か、手押しのみごを使用して熔かせるほどの量の鐵しかうる方法を知らぬ種族か、もしくは旋盤も知らぬ時代の中に生れたとしたなら、かれが如何なる發明的天才を持つたとしても、蒸氣機關のことなど考える機會はないであろう」(註二)。

産業革命において諸發明が相次いでなされたことは、この時代において、中世封建的社會關係が崩壊し始め、そのうちから新しい生産關係を必然とする經濟的・社會的の欲求が強力に發生し來つたからである。

産業革命について第二に考えねばならないことは、これらの諸發明は決して氣紛れに、無秩序に、恣意的になされるものではなくして、系列的に、體系的連關をもつてなされたことである。

マルクスの指摘するように、一つの産業部門における生産方法が革命されれば、先ずこれと関連する他の産業部門における生産方法も革命されざるを得ない。これはマヌファクチュア以來とくに發達して來た技術的および社會的分業のためである。分業によつて分れた各部分はそれ自身獨立した商品を生産しつつも、しかも他との連關において全體系の一過程をなすものであるからである。紡績は綿から糸をつくる一つの獨立した生産部門である。しかしまた織物業に對して糸を提供する分業過程でもある。棉花耕作、棉花から種子を除却する部門、紡績、製織、漂白、捺染、衣服業はそれぞれ全過程において關連した關係に立つ分業部門である。だからそのうちの一つの部門に機械化が行われてそれによつて生産の速度、量、質に大きな變化が行われれば必然他の部門の機械化を呼び起さざるをえない。そしてまた木綿工業部門全體がかかる機械化過程をとるならば、その他の羊毛工業、麻工業、レース工業、絹工業、メリヤス工業等の纖維業全般の機械化を誘致する。そうなれば、その機械を動かす動力、それらの機械及び動力機關の製作に必要な原料としての製鐵、炭鑛、製鉛、製銅等の産業部門における革命をも必至ならしめる。また産業部門の機械化による生産力増加はそれに資材を供給する農業部門の生産力増加を必要ならしめそれは農具の革命を必然ならしめる。たとえば綿繰機 (cotton gin)、自動結束器 (self-binder) の

ごとき、自動攪拌器 (automatic churn)、改良鋤 (improved plow) のごときそれである。更に全生産部門の革命は當然、それらに資材を運び、生産品を市場と結びつける輸送手段の革命へとつながるのであり、かくて全經濟部門の機械化へと導く。しかし、機械をもつて機械を生産するにおいてはじめて大工業は自己を完成するのである。マルクスのいうごとく、大工業は、その特徴的の生産機關たる機械それ自身を掌握し、機械をもつて機械を生産するに至らなければならず、ここにはじめて大工業は自らに相應した技術上の基礎をつくり出し、己れ自身の足を以つて立つに至つたのである。

産業革命について第三に考ふべきは、自然的存在物としての機械と、社會的存在物としての機械との區別について、明確な認識を持たなければならぬことである。マルクスは資本論において、「機械はそれ自身としては労働時間を短縮するが、その資本主義的利用は労働日を延長する」「機械はそれ自身としては労働を軽減するが、それらの資本主義的利用は人間を自然力に屈服せしめる。」「機械はそれ自身としては生産者の富を増大せしめるが、その資本主義利用は、生産者を被救恤者に轉化せしめる」。だから機械の出現によつて労働者の生活が苦しくなつたとすればそれは機械それ自身に原因があるのではなくして、機械の資本主義的利用、換言すれば資

本主義社會における生産手段としての機械の私有性に原因を求めなくてはならない。機械發明當時、リボン及びレース織機に對する労働者の反抗、ハーグリーブスのジェニー機、アークライトの梳綿機、クロンプトンのミューール機に對する労働者の機械破壊の運動、一八一一—一五年にかけてのイギリスの Luddites Disturbances (註三)、フランスのジャッカール (Jacquard) 一揆、一八三一年のリヨン (Lyon) の暴動(註四)、ドイツのオイレンゲベルゲ (Eulengebirge) の織工一揆などの一連の機械破壊暴動は、マルクスの言を借りれば、「労働者が機械とその機械の資本主義的利用を區別し、かくしてかれらの攻撃的を物質的生產機關それ自身から、物質的生產機關の社會的利用形態に轉換することを知らうようになるまでには、時間と經驗とを要したのである」(資本論、第一卷、第十三章、第五節、労働者と機械との闘争)。

イギリスにおける産業革命の直接の經濟的結果としては、産業の發達、人口の増加、富の發展として現われた。工業、農業、採鑛業などは機械の發明によつて大規模となり、その生産力は異常に發達した。例を鐵にとれば、イギリス全土の鐵の生産は一七四〇年において一七、三五〇噸であつたものが、一九一〇年には一〇、〇〇〇、〇〇〇噸となり、木綿工業生産高は一七六〇年

から一九一〇年の間に六〇〇倍した。また新しい多くの種類の産業が勃興した。

機械による商品生産力の増加、汽船、鐵道、鋪石道路、電信、電話などの交通手段の發達は、世界の距離を短縮し、もつて國際、國內の商業を一層發展せしめた。イギリスの木綿貿易は一七八年から一八〇三年の十五年間に三倍になつた。アメリカ及びヨーロッパの總貿易額は僅か半世紀(一八三〇—一八八〇年)の間に八〇〇%増加した。かゝる貿易の發達はまた國際的分業を可能ならしめ、各國の特殊の工業が起りうるに至つた。イギリスの織維工業および双物業 (chemistry) のときはその例である。

だから産業革命は、單に工業における革命ばかりでなく、農業革命 (Agricultural Revolution)、商業革命 (Commercial Revolution) でもあつたのであり、全經濟部門の革命を意味したのである。産業革命による生産の發達は、食物衣服等の生活必需品の生産を増加せしめたが、かゝる基礎の上に立つて、人口の數は絶對的に増加した。第十九世紀の前半においてイギリスの人口は倍加した。十九世紀全般においてはヨーロッパ全體の人口は、一七五、〇〇〇、〇〇〇から三九二、〇〇〇、〇〇〇へと倍以上に増加している。この増加の傾向とともに著るしい特徴は人口の都市集中の傾向である。トインビーの記する所によると、(The Industrial Revolution of the Eighteenth

	1685年	1760年	倍數
リヴァプール	4,000	40,000	10
マンチェスター	6,000	30,000	5
バーミンガム	4,000	28,000	7
リバー	7,000	—	—
シェフナルド	4,000	30,000	7.5
ブリストール	29,000	100,000	3.4
ノッチンガム	8,000	17,000	2.1
ノルウイッチ	28,000	40,000	1.4

Century in England. p. 10—) 一七〇〇年と一七五〇年の間に、

人口の分布に變化が起り、木綿工業および羊毛工業の中心地であるランカシアおよびウェスト・ライディング地方への人口の集中が行われつつあつた。と同時に産業の起りつつあつた都市の人口は急激に増加しつつあつた。

グレゴリー・キング (Gregory King) によれば、一六九六年ロンドンの人口は五三〇、〇〇〇人、他の諸都市八七〇、〇〇〇に對して、農村人口は四、一〇〇、〇〇〇人であつた。その數年後のアーサー・キング (Arthur King) の報告によると、ロンドンには全イギリス人口の六分の一が集り、全人口の半分は都市に集中したといつてゐる。ヘイスの記述によれば、産業革命によつ

	1861年	1871年	1881年	1891年
都市の人口	62.3	64.8	66.6	71.7
農村の人口	37.7	35.2	33.4	28.3

この數は、Beard, *ibid.* p. 68 所載

てイギリス人口の四分の三は都市住民となり、第十八世紀の初頭七萬以上の人口を有する都市は全歐で十四であつたが、同世紀末には百四十都市へと十倍に増加した。

ビヤードは「かゝる都市への人口集中運動は主として機械革命の結果であるといふ事は機械制産業が高度に發達している地方の都市の人口増加が多いといふことによつて證明される」(Beard, *ibid.* p. 64)とつてゐる。すなわち、封建制農村の社會關係の崩壊その他の原因によるプロレタリアの都市侵入、および莫大な商品生産に蟻集する商人達の都市殺到によるものである。

またかゝる生産力の増加は他方で社會の富を激増せしめた。銀行の預金は増加し、資本の蓄積がなされた。ヘイスは「過剰の富は數百萬の人を助け、彼等に快樂と奢侈を與えたかも知れない。しかしその大部分の富は少數の富豪の手に蓄積され、かれらの別荘やヨットや旅行馬車はルイ十四世の宮殿や馬車をはすかしめるほどであつた。産業革命の最大の利益がごく少數の人

の手に獨占されたといふことは一見して奇妙に見える。その理由は機械發明それ自身の中に發見さるべきではなくして、工場制度の形成のうちに求めらるべきである。然り、全人類の富となるべき生産力の變革が、多人數を犠牲とするべく少人數の富となり終つた秘密は、機械それ自身のうちにあるのではなくして、その機械の所有關係、すなわち新しく生れた生産關係のうちこそ發見されるのである。その生産關係こそ産業革命によつてもたらされた資本主義的生産關係そのものである。

(註一) アッシュレーは、黒死病と農民反抗との關係について、つぎのよきな意見を抱いている。すなわち、當時ソロルド・ロージャース (Thorold Rogers) は、約三十年以前に貨幣代納が行われ、黒死病が貨幣債上の原因となつたがために、領主は代納された貨幣をもつてきては同量の勞働力を雇いえないから再び隷農にたいして勞働給付をなすことを強制したことから農民の反抗が勃發した、と主張しているにたいし、アッシュレーは、かゝる考は、領主が農業發達の歴史を逆行せしめんとしたことが反抗の原因であるとするのであるが、「かゝる考にたいしてはなんらの證據も存在しない」と斷じ、これにたいし自分の考を述べている。黒死病の結果、農民は自己の勞働力の價値を自覺し、領主にたいし、勞働義務の緩和、勞働給付の代りに小額の貨幣を以てすべきを要求した。しかし領主はこれを拒絶した。農

業勞働力は五割騰貴した。そこで、まだ貨幣代納が行われて間もないところでは、領主は、まだ選擇權を持つていたから、勞力給付を要求し、従わざる時は莊園裁判所に訴えて罰金を徴収した。かゝる行爲が農民を憤激させ、勞働給付を拒絶し領主の強制處置に反抗して蜂起したのが、農民反抗であるといふ。アッシュレーはそれに、當時におけるフランスカン教團やドミニカン教團の説教者たちが、人間の平等 (human equality) を一般に主張し、領主を攻撃してゐた理由を附加してゐる (Ashley, *ibid.*, p. 50-51)

(註二) 『發明の内部歴史。機械發明の徐々たる發達を取扱つたこの數頁は、多くの英雄たちの頭から後光を取り去る。多くの大發明の一つといえども一人の天才の頭腦からのみたたき出されたものでないことを、われわれに示している。それは機械發達史における偉人説—Great man theory—を破碎する。非常な才能を天からめぐまれた多くの發明家があつたことは否定できない。しかし、その才能も、かれらの仕事の上に残つてゐる數時代の集合智を研究することにおいて、そしてまた同一問題と取組んだ人のところみ、過失、失敗、成功によつて利益することにおいて、はじめて現われるのである。大發明の一つと雖もその全部を一人の發明家に歸することはできない。一八五七年ホッジ (Hodge) は委員會において證人としてつぎのように指摘した。「われわれが今日用いてゐる紡績機は約八百の發明の複合物であると思われ。現在の捺染機は約六十の特許の複合物である」と。もしわれわれが機械發明の内部的歴史にふりかえるならば、大なる進歩の秘密は容易に判る。すでに見たように、機構のどの部門に

おいても、おのおの他を勵ましたり、助けたり、新らしい事實を、後繼者にうけ渡ししたりする多くの労働者があつた。ボール、ワイアット、ケー、ハーグリーブス、アークライト、クロンプトン、カートライトその他の人たちは織維問題を取扱つた。バベン、サヴァリー、ニューコメン、バイトン、ワット及びその他歴史にその名のあらわれない大勢の人々が、蒸氣汽關の完成に加わつたのである。同様のことはすべての大發明にも適用される。偉人についてのわれわれの理論がいかなるものであれ、われわれは次に述べるスペンサーの言葉を容認せざるをえない。すなわち「かれの社會が過去から承けついで物質的、精神的の蓄積がないなら彼は無力である。また、共に存在する人口、性格、智識および社會的設備がないなら彼は無力であろう。たとえば、シェークスピアをみよ。文明生活の多くの傳統がなかつたならば、また過去がうけつがれてかれの思想を裕かにした各種の經驗がなかつたならば、また數百世代が發達させ使用によつて豊富にした言語がなかつたならば、如何なるドラマが書かれえたであろうか。たとえばワットを思え。もしかかれが鐵のことを少しも知らない種族か、手押しのみこと (hand-bellows) を使用して熔かせるほどの量の鐵しかうる方法を知らぬ種族か、もしくは旋盤を知らぬ時代のなかに生れたとしたなら、かれが如何なる發明的天才を持つたとしても蒸氣汽關のことなど考える機會はないであろう」(Bead, *ibid.* p. 38—39)。

(註三) 一八一一年ノッティンガム (Nottingham) およびその近傍に起つた機械破壊暴動である。ラッド王、またはラッド將軍 (King Ludd, General Ludd) を首領としたという言傳によりラッドダイット

動といわれる。最初は靴下およびレース機の破壊を行う。ヨークシャイヤー、ランカシャイヤー、ダービーシャイヤー、ライセスターシャイヤーなどにもこの運動は蔓延した。貨銀の引下げおよび、機械で作られる生産物の品質の悪化に反對した。一八一二年、襲撃された資本案ホールスファル (Horsfall) の要求によつて多くの運動者が殺され、リヴァプール侯 (Lord Liverpool) は、鎮壓のため苛酷なる法律を發布した。これにたいし詩人バイロン (Byron) は勇敢に反對した。この運動は壓迫によつて一時抑壓されたが、一八一六年再び蜂起した。

(註四) このリヨンの暴動において、労働者は、労働しつつ生きるか、しからずんば闘いつつ死ぬ (Vivre en travaillant ou mourir en combattant) をスローガンとした。

納本

社會主義經濟學・XIX

昭和二十三年十二月十五日 初版印刷
昭和二十三年十二月二十日 初版發行

資本主義成立史
定價貳百圓

著者

石濱知行

發行者

河出孝雄

編集者

田邊典夫

印刷者

小島順三郎

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河出書房

會員番號A一一〇一四番
電話區二三四七番
振替東京一〇八〇二番

印刷 株式會社秀英社・製本 小原





